

戦後80年特別企画展

つながる記憶、未来へ



種子島開発総合センター鉄砲館では、戦後 80 年の節目の年である 2025 年の春から戦争に関する証言や資料の募集を行い、夏に特別企画展「つながる記憶、未来へ」を開催しました。

本記録集では、特別企画展で紹介した証言や資料を掲載すると共に、展示では文字数の関係で割愛した内容も、一部増補して掲載しています。

また、戦後 70 年（2015 年）に当館で行った企画展「記憶～失のう前に聞かしょうわい」で収集した証言も、次の世代へ継承していくという目的で、併せて収録しています。

この記録集が、過去に学び、未来を考えるきっかけになれば幸いです。

謝辞

本企画展の開催および記録集制作にあたり、ご協力いただきました下記の関係機関や個人の皆様に、深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

荒河とよみ・池亀カヅエ・射場利雄

樗木彰二・川畑光徳・川畑イツエ

窪田良二・上妻忠昭・上妻陽二郎

徳永睦夫・奈尾正友・長野道雄

羽生朋子・羽生梨緒・林 哲郎

古澤 勝・前之園桃代・牧山克郎

宮田成幸・米澤裕介・米澤政子

知覧特攻平和会館

西之表市立図書館

西之表市役所企画課

目次

年表（世界と国内のできごと・種子島のできごと）	4
校区・集落位置図	6
1 戦地に赴いた種子島の人々	7
射場 盛市さん 長野 操さん 上妻 定之さん 樗木 廣二さん	
大山 茂市さん 上成 義徳さん 河口 守さん	
特集 戦地からの手紙	17
2 種子島で過ごした戦中・戦後	25
射場 利雄さん 古澤 勝さん 池亀 カヅエさん	
付録 太平洋戦争末期の「鍋割」が持つ意味	
上妻 忠昭さん 川畑 光徳さん・イツエさん	
九七式艦上攻撃機引き揚げ	34
企画展「つながる記憶、未来へ」展示風景	35
3 戦後70年企画展「記憶く失のう前に聞かしようわい」より	37
上妻 敏彦さん・羽島 宜夫さん 岩坪 トシ子さん 落合 浩英さん	
山下 和子さん 武田 敏恵さん・平石 カツエさん 向田 マシエさん	
沖田 勉男さん・律子さん 長野 幸男さん	
展示資料	48
参考文献	50

凡例

- ・年表の空襲の記録は、西之表に係るものを記述しています。
- ・証言者の年齢は、証言日の年齢です。
- ・戦後80年の証言記録は、録音したものを読みやすく編集しています。
- ・48、49ページの展示資料のうち、特に記載のないものは、種子島開発総合センター収蔵資料です。
- ・文中の「北支」「中支」という表現は、それぞれ「中国北部地域（華北）」「中国中部地域（華中）」を表します。現在ではほぼ使われない表現ですが、太平洋戦争終結以前には地理用語として一般的な表現であり、本誌中でも歴史的な地理用語として使用しています。

※¹ 満州事変 柳条湖事件をきっかけに、日本軍の関東軍が満州全土を占領。以後、軍国主義化が加速した。

※² 満州国建国 満州国は、表向きは清王朝最後の皇帝溥儀を元首とする独立国家としながら、実際は関東軍の支配下にあった。これにより日本は国際的に孤立を深めた。

※³ 2.26事件 天皇中心の軍事政権樹立を目指した陸軍将校らが、重要閣僚ら9人を殺害した、クーデター未遂事件。

※⁴ 盧溝橋事件 中国の盧溝橋で発生した日本軍と中国軍の軍事衝突事件。この事件がきっかけで日中戦争が始まった。

12月 馬毛島の海軍施設建設工事はじまる
増田 牛之原海軍飛行場基地建設が決定

8月 種子島海軍飛行場基地建設はじまる

6月 特設警備第203大隊が
種子島に配備される

1月 第21警備司令部が臨時編成され、
種子島・屋久島に配備される

2月 12日以降、多数の兵士の遺体が
種子島・馬毛島の西海岸に漂着

7月 独立混成第23連隊が臨時動員され、
「種子島守備隊」を編成

11月27日 種子島海軍飛行場開隊

2月 種子島・馬毛島の西海岸に100体を
越える日本兵の遺体が漂着

3月18日 西之表町にグラマン戦闘機
12機による初めての空襲

〃 増田飛行場にグラマン戦闘機
4機が爆弾投下、機銃掃射

3月25日 グラマン戦闘機2機が
西之表市街を空襲

1931
昭和6年

9月18日 満州事変勃発^{※1}

1932
昭和7年

3月1日 日本軍関東軍が^{※2}
満州国を建国

1933
昭和8年

日本が国際連盟を脱退

1936
昭和11年

2.26事件^{※3}

1937
昭和12年

7月7日 盧溝橋事件^{※4}
日中戦争はじまる

1938
昭和13年

5月 国家総動員法施行

1939
昭和14年

9月 ドイツがポーランドに侵攻
第二次世界大戦はじまる

1941
昭和16年

12月 日本がマレー半島、
ハワイ真珠湾を攻撃
太平洋戦争はじまる

1942
昭和17年

日本軍がシンガポール、フィリピン、
インドネシア、ビルマなど占領

4月 米軍による日本本土初空襲

6月 ミッドウェー海戦で
日本海軍が敗北

1943
昭和18年

10月 学生の徴兵猶予停止^{ちょうへいゆうよ}
学徒出陣

1944
昭和19年

2月8日 りま丸が東シナ海で
米軍潜水艦に撃沈される

8月 学徒勤労令・女子挺身勤労令^{ていしん}

10月 特攻隊による体当たり攻撃開始

1945
昭和20年

3月10日 東京大空襲

3月17日 神戸大空襲

3月27日 硫黄島守備隊全滅

- 1945
昭和20年
- 4月19日 B 24 が2機、焼夷弾を多数投下
種子島中学校全焼
 - 4月24日 B 24 が1機、市街地に焼夷弾 36 発投下
 - 4月 全島の小学2～6年の児童が
伊佐・大口方面へ疎開開始
 - 5月13日 グラマン戦闘機8機、浦田・伊関・
安納・西之表市街を銃爆撃
 - 5月14日 グラマン戦闘機9機、西之表市街を銃撃
 - 5月19日 独立混成第109旅団が
臨時動員され、種子島に配備
 - 6月16日 小型機8機、現和国民学校を銃撃
 - 7月10日 小型機24機、西之表・現和・住吉を銃爆撃
 - 7月11日 コルセア36機、犬城飛行場に500ポンド
爆弾52発投下
 - 7月14日 大型機8機、西之表市街地に
中型爆弾24発を投下
 - 〃 コルセア18機が、種子島に
停泊中の船舶や桟橋などを爆撃
 - 7月15日 B 24 が犬城飛行場、大崎海軍飛行場、
安納飛行場などを爆撃
 - 〃 コルセア24機が西之表の発電所などに
機銃掃射
 - 7月25日 B 24、市街地に銃爆撃
 - 7月28日 B 24 が洲之崎に爆弾3発投下
 - 8月6日 伊関沖ヶ浜田に13機襲来 機銃掃射

- 4月1日 米軍、沖縄本島上陸
- 4月7日 戦艦大和が種子島西方沖で
爆撃を受け撃沈

- 6月17日 鹿児島大空襲
- 6月23日 米軍が沖縄を占領

- 8月6日 米軍、広島に原爆投下
- 8月8日 ソ連、対日宣戦布告
- 8月9日 米軍、長崎に原爆投下
- 8月 ソ連が満州や樺太などに侵攻
日本人60万人以上を捕虜とする
- 8月15日 玉音放送 終戦

- 9月 ソ連、シベリアなどの
抑留地へ捕虜を移動

1946
昭和21年

- 12月 ソ連からの帰国が始まる

1947
昭和22年

- 5月3日 日本国憲法施行

1951
昭和26年

- 9月8日 サンフランシスコ平和
条約に調印

1952
昭和27年

- 2月10日 トカラ列島が日本に返還
- 4月28日 沖縄、奄美群島など
一部を除いて、日本が独立を回復

1953
昭和28年

- 12月25日 奄美群島が日本に返還

1956
昭和31年

- 12月26日 ソ連からの最後の引き
上げ船興安丸が、京都舞鶴港に入港

1972
昭和47年

- 5月15日 沖縄が日本に返還



1. 戦地に赴いた種子島の人々
〈家族・知人の証言〉





い ば もりいち
射場 盛市さん 西之表市古田 番屋峯 出身

昭和13年5月、召集され、陸軍第6師団に配属。

昭和13年10月、中支^{ちゅうし}においてマラリアに罹^{かか}り、戦病死。

戦死時の状況と「父は輜重兵^{しちゅうへい}※だった」という利雄さんの証言から、第106師団輜重兵第106連隊に所属していたと思われる。

※輜重兵 弾薬や食料、資材など戦地で必要な物資の輸送や支給^{しきゅう}を行う。

射場 利雄さん (94歳)

西之表市古田 番屋峯^{ばんやみね}

取材日 2025年5月1日

出征するときの様子

「親父が出征した頃は、まだ日本が国を挙げて「勝った、勝った！」の一番勢いのある頃だから、古田の神社に校区民が集まって、盛大に送別会をしてもらいました。親父と同じ日に古田から出兵する人は3人で、親父が一番年上だったのか、代表してあいさつをしました。『4人の子供と妻を残していくので、あとは頼む』というようなことを言ったのを覚えています。」

西之表に続く道が見える高台の公園に校区民が集まって、歩いて西之表に向かう出征者とその家族、校区の代表たちに向かって小旗を振って、「万歳^{ばんざい}！万歳！」と見えなくなるまで見送られました。」

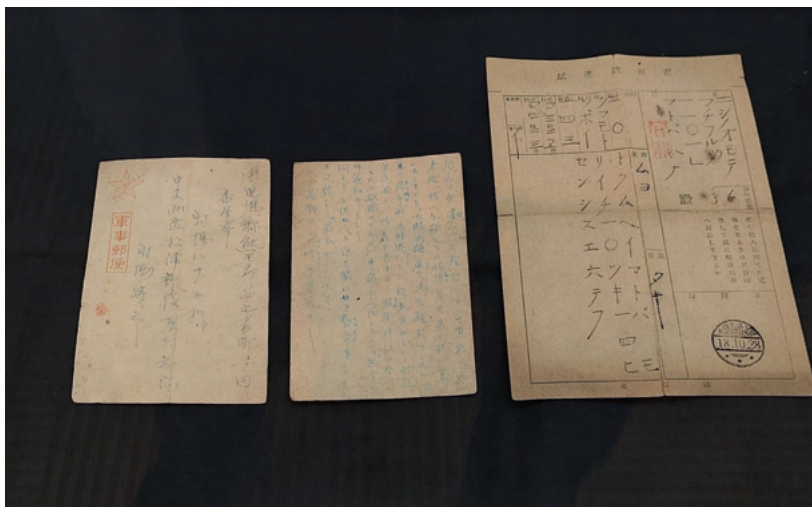
父の戦死

「私の親父は、現和の人と南種子^{くきなが}の茎永^{くきなが}の人と同じ部隊で、兄弟のように生活していたそうです。戦地の父から母へ手紙が届いて、この手紙はずっと大切にしています。」

親父が戦死したのは、出征から5か月後の10月14日。その時、親父の部隊が徳安というところで敵に包囲されてしまい、米はあるけど火を焚^たけないから生米をかじって、死体が流れてくるような川の水を飲んで、待機をしていたそうです。

ところが、親父は下痢をし始めて、おまけにマラリアにもかかって、何日かするうちに死んでしまったそうです。火葬^{かそう}をすることができなかったので、種子島出身の人達が親父の

国家総動員法が公布された昭和13年に、射場さんの父・盛市さんは中国に向けて出兵^{しゅうべい}しました。当時8歳だった射場さんから見た、その当時の様子などを話してくださいました。



ハガキ・戦死電報

射場盛市さんが出征後、妻に宛てて出したハガキと、盛市さんの戦死を知らせる電報。ハガキには、鹿児島市の照国神社近くの旅館に泊まっていることなどが書かれている。

出征時、妻のハナさんは5人目の子どもを妊娠中でした。射場さんは、入営して大陸に渡る前に、鹿児島から妻にハガキを出しています。4人の子どもと身重の妻を置いて出征するのは、さぞかし心配だったことでしょう。

夫の死後、ハナさんは無事に男児を出産。夫の生前の便りをもとに命名しました。

戦中戦後の数々の苦難を乗り越え、ハナさんは三男二女の子どもたちを立派に育て上げました。

腕だけを切り取って布に巻いて、包ほう囲網いもうを脱出してから焼いて送ってくれたそうです。

親父の戦死の電報が来た10月28日は、ちょうど漢口陥落※のお祝いを日本中ですという日でした。番屋ばんやの人達も、みんな古田の公民館に提灯ちようちんをもって集合することになっていて、私たちも古田に向かっていました。

ちょうど古田の町に入るといところで、この戦死電報を持った人と出会い、父の戦死を知り、結局、番屋ばんやの人達は古田まで行かないで、そのまま帰ってきました。

11月に熊本まで親父の遺骨を取りに行くことになって、おじ達3人と、当時8歳だった私が行くことになりました。遺骨を受け取って営門を出るまでの間は、私の胸に遺骨を抱かせてくれて、門を出てからはおじ達が持ってくれました。

親父の遺骨を開けて見たときは、ちゃんときれいな白い骨だったから、本当の親父の骨だったと思います。

す。昭和20年頃になると、本人の遺骨が遺族のもとへ戻らないことがほとんどだったと聞きますから、親父は種子島の戦友が本人の骨を持ち帰ってくれて、本当に良かったです。」

※漢口陥落 昭和13年10月、日本軍は中国の重要都市である漢口を占領。前年の南京陥落に続く日本軍の快速撃に、日本中が祝賀ムードに沸いた。





長野 操さん

西之表市上西 杵之峯 出身

昭和 17 年 1 月 現役兵として歩兵第 45 連隊に入隊。

大陸上陸後、歩兵第 71 連隊第 5 中隊
に編入され、国境警備につく。

昭和 19 年 2 月 第 9 野戦補充隊第 1 大隊第 3 中隊に転属
し、中支に転進。

昭和 20 年 8 月 武昌において終戦。

安慶で抑留生活を送った後、昭和 21 年 3 月に復員。

「戦地より母へ」

「長野操さんは、上西 杵之峯の人
でした。昭和 17 年に召集されて陸軍
に入隊し、大陸の戦地へと送られま
した。操さんは戦地でお母さんに手
紙を書いて、出そうと思ってポケッ
トに入れていたけれど、出せないう
ちに前線に送られてしまい、そのま
ま出すのを忘れていたそうです。終
戦になって、帰るために着替えをし
ていると、ポケットに手紙が入って
いることに気が付いて、「そうだっ
た!」と思って手紙を握りしめて
帰ってきたら、お母さんはすでに亡
くなっていたそうです。
手紙をお母さんに渡せなかったの
で、操さんはその長い手紙を 4 編の
詩にまとめたんですね。」

牧山 克郎さん (85 歳)

西之表市上西 池之久保

取材日 2025 年 5 月 12 日

2025 年 5 月初旬、長野操さんが書いた「戦
地より母へ」という詩の額が、鉄砲館に寄贈
されました。そして、その詩を清書して額装
したのが、牧山さんでした。この詩を額装し
た経緯や、長野操さんのことについて、お話
を伺いました。

そして、それをお母さんのお墓に入
れたいということで、私のところに
「これを書いてくれ」って持ってき
たんです。楷書で書いたり、草書で
書いたり、4 種類くらい書いた中で、
操さんがこの字体※を選びました。
(※11 ページ上)





長野操さん作「戦地より母へ」

戦地より母へ 長野 操

戦地より母へ

昭和十九年二月大東亜戦争
日本・中支より母へ

一、ふるさとの便りをふところ

銃を抱き寝の 仮りの宿

父さん 母さん 無事な顔

夢に見るのも うれしいネ

二、今日も残敵非賊刈り

小癪な奴等よ 便衣隊※

大した手柄も 未だ立てず

肩身のせまい 思いする

三、男召されて 来たからは

恥はさらさぬ 骨さらす

安居楽土の 建設に

中支で 一肌脱いでいる

四、武運あるのか この身には

掠り傷さえ ひとつない

命捧げた 日の丸の

旗と生死を 共にする

平成二十一年十月 牧山克郎 書

※便衣隊（便衣兵）

一般市民と同じ服装をして

各種敵対行為を行う軍人のこと

歩哨※のつらさ

「操さんは二等兵で、毎日歩哨に立たされたそうです。歩哨は一晚中闇の中に立って、見張り番をするんですね。夜中、明かりの全くないところで、敵にいつ襲われるか分からない中、おびえながら番をしていたそうです。やるかやられるか、生きるか死ぬかの瀬戸際ばかりを歩かされたと言っていました。生き残って戦地から帰って来られた他の人たちも、歩哨に立つのが一番辛かったと言っていました。敵が目の前に現れた時には、とっさに銃は使えないので、30センチくらいの短剣で倒すそうです。一発で殺さなければ自分がやられるので、一発で急所を突く訓練を受けるわけです。でも上手くいって、相手を倒したとしても、辛くて涙が出るそうです。何の縁もなく、何の罪もない人たちが、殺し合いをするのが『戦争』なんです。」

※歩哨 見張りのこと。

敵の襲撃などに備えて警戒する兵士。

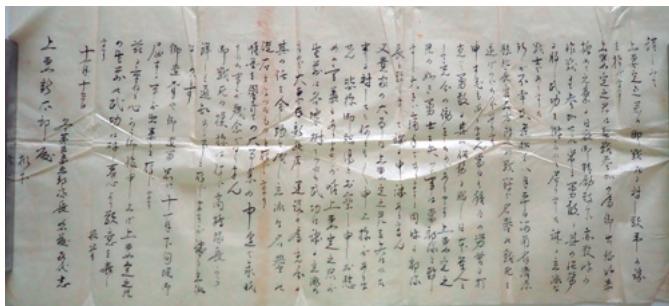


こうづま 上妻 定之さん

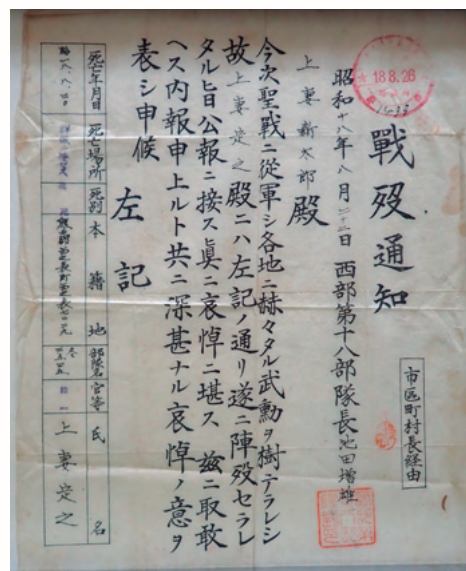
西之表市西之表 松島 出身

召集時期は不明。第37師団歩兵第227連隊に所属。
昭和18年8月20日、中国河南省において、戦死。
享年21歳。

定之さんの戦死に際し、連隊長から父親の新太郎さんに御悔みの手紙が届けられました。また中隊長からは、戦死の状況を詳細に伝える手紙も届きました。



皆藤連隊長からの手紙



戦死通知

定之さんの戦死の状況を伝える高橋中隊長からの手紙

謹みて御令息定之君の名誉の戦死に対し、衷心より敬弔の誠を捧げます。
生を皇国に禀け戦の庭に立つ者、素より誰か生還を期ましよう。
大君の御為に屍を馬華に裹む※1は帝国軍人の本懐之に如くは無く、一家一門の名誉とは申しながら未だ春秋に富む※2前途有なる御令息の身を思い、家郷にありて日夜武運の長久を念じつつあられる家族御一同様の御心中、如何ばかりかと御推察申します時、私情に於きましては誠に御気毒の極みにて断腸の念禁ずる事が出来ません。
茲に御令息の御戦死前後の状況を詳しく申上げ、皆様に対しせめてもの御悔みの辭と致します。
先に数次の作戦討伐に依り惨々な痛手を被り、黄河南岸へ敗退せし敵は、新に新鋭中央軍を渡河北上せしめんと企図しある報に接し、中隊は黄河河防を強化すべく毎夜の如く渡河点付近に潜伏を続けて居りました。御令息定之君は、八月十九日夜山澤少尉指揮の下に北長泉部落西方五〇〇米附近河岸に潜伏致して居りましたが、二十日午前一時頃南岸にて人の話声がし、やがて敵舟艇一隻北上中を発見、直ちに之に猛射を浴びせました。敵は我火力により渡河を断念、船艇を引返しましたが、対岸の敵重火器は一斉に我に射撃し来ったのであります。
噫、其時飛び来った一弾は最前方にありて敵を射撃して居られた御子息の頭部を貫通したのであります。

※1「屍を馬華(革)に裹む」：戦死した者を馬の皮で包むという伝統から来ている表現。必要ならば命を捧げるという勇士の心構えを示している。
※2「春秋に富む」：若くて将来性がある人のこと

直に戦友駆け寄り抱き起しましたが、時既に遅く莞爾※3として黄河河畔(中華民国河南省 濟源縣北長泉西方五〇〇米 地点)に雄々しく聖戦の華と散られたのであります。
時に八月二十日午前一時五分であります。
嗚呼、御令息の如き立派な勇士を失いしは、中隊はもとより国軍の為悲しき限りであります。
然しながら同君等の奮斗により敵の渡河北上企図を完全に破砕し得たのであります。
顧みますれば、本年二月現地到着以来、多忙なる戦陣生活によく困苦に堪え、缺乏に打ち勝ち数次の討伐作戦に、或は日夜の警備によく上官の教えに従い、積極的に奮斗を続けて居られました。
然るに今々幽明境を異にし※4、再び其勇姿に接することが出来ません。併し御令息の歎しこそ永えに香しき護国の華と讀うべきものであります。私共は御令息の遺志を継ぎ、大東亜戦争遂に粉骨砕身努力致します。
何卒、御遺族御一同様におかせられても御令息の遺志を継承せられ銃後責務の完遂に邁進せられます様御願ひ申上げます。
茲に御令息戦死の状況を御知らせ致、併せて衷心より哀悼の誠を捧げます。
尚新秋快適の砌、御身御大切にせられます様、御願ひ申上げます。

九月十三日

中隊長 高橋 義光

※3「莞爾」：にっこり微笑む様子。
ここでは「穏やかに」「満足げに」という意味か。
※4「幽明境を異にする」：死に別れるという意味。



おてき ひろじ
樗木 廣二さん

西之表市上西 池之久保 出身

昭和 16 年 4 月、東京陸軍航空学校入学（16 ～ 17 歳）

昭和 17 年 4 月、太刀洗^{たちあらい} 陸軍飛行学校へ進学

昭和 18 年 4 月、熊谷^{くまがい} 陸軍飛行学校甲府分教所に転校、
 9 月末卒業

昭和 18 年 10 月、台湾の第 106 教育飛行連隊に配属
 戦闘機操縦者になる特別操縦見習士官の
 教育にあたる

昭和 19 年 12 月、第 3 航空軍司令部付となり、
 シンガポールに派遣

昭和 20 年 4 月、第 18 錬成飛行隊に転属（ジャワ島）

昭和 20 年 5 月、第 7 錬成飛行隊と合併するため、マラン
 飛行場からパレンバン^{ひえん} 飛行場に転進し、
 飛燕^{ひえん} 戦闘隊となる。飛燕隊員として、ジャワ、
 スマトラ地区の防空戦闘、船団^{えんご} 掩護等に従事

昭和 20 年 8 月、パレンバン飛行場において終戦

昭和 21 年 復員



樗木さんが着用していた航空服上下



飛燕戦闘隊名簿・航空学校写真集



大山 茂市さん

西之表市西之表出身

生前の本人の証言から、ソ連と満州の国境付近に配備された関東軍の憲兵隊だっことが分かっている。

召集時期や、所属部隊は不明。

戦後 11 年にわたるシベリア抑留の後、昭和 31 年に復員。

大山さんの部下が命がけて持ち帰った写真の複製。最前列中央付近のヒゲを生やした人物が大山さん。



大山茂市さんのこと

「大山茂市さんは西之表の人で、ソ連と満州の国境に憲兵隊として派遣されていました。憲兵というのは普通の軍人ではなくて、特殊な警察のような役割で、優秀な人が選ばれるんですね。その中でも大山さんは大佐にまでなった人です。写真（右上）では真ん中で軍刀も持っていますから、大変えらい人です。」

でも終戦で武装解除された後、シベリアに 11 年間抑留されて、何度も死ぬ思いをして、ようやく最後の引き上げ船の興安丸で昭和 31 年に帰ってきました。この写真は、部下の石田さんという人が、決死の覚悟で小さな写真を下着の中に隠して持ち帰ったものを拡大したそうです。憲兵隊だったということがバレる

古澤 勝さん（85 歳）

西之表市西之表中目

取材日 2025 年 4 月 28 日

古澤さんは、幼少期を戦時下で過ごし、戦後は、さまざまな戦争体験をたくさんの方から聞いてこられました。その中から、知人の大山茂市さん（故人）のお話を聞かせてくださいました。

と、みんな銃殺だったので、どうにかバレないようにして耐え忍んだわけです。

シベリアでは食べ物もなくて、飢えで死んだり病気で死んだりするわけです。食べるものがなくて、生きたカニを捕まえて食べて、赤痢になったりしたそうです。冬も極寒です。もう大変だったと聞きました。

部下が何人も死んでいくのを見ながら大山さんは 11 年も耐えて、最後の引き上げ船で京都の舞鶴港に帰ってきて助かったんです。」



かみなり

上成 義徳さん

西之表市上西 おおげり 大花里 出身

昭和 12 年、召集。

陸軍の独立歩兵第 11 連隊機関銃隊に配属、北支を転戦。

昭和 20 年 4 月 22 日、第 80 振武隊^{しんぶたい}※として知覧飛行場から沖縄方面へ出撃、戦死。享年 25 歳。

※振武隊 1945 年（昭和 20 年）3 月 26 日から始まった沖縄戦における陸軍第 6 航空軍隷下の特別攻撃隊として編成された。

何等盡ストコロナク 只々後悔致スノミ
然レドモ既ニ
大君ニ捧ゲ奉ツタ身体、愚カナ義徳
選バレテ此ノ大任ニ就ク感涙押ヘ難シ
一人亡クシテ 泣ハエハす由メ
二人捧ゲ多ク人もある
泣クナ決シテ泣イテ下サルナ 義徳
亡キ後ハ益々強イ父母上ニナツテ下サイ
ソレケケヲ御祈リ致シマス
弟八振武隊員トナリテ
父母上様 義徳

両親への遺書

意氣軒昂
君がめ
雄々しく散らん
出撃前夜
桜花
弟八振武隊
上成曹長

辞世の句

二十有餘年ノ郷恩ニ深謝ス
青ノ及バザルヲ悔エルノミ而モ若
父母ノ心子ニ通ジ子心父母
ニ通ゼン
今般宿望ノ特別攻撃隊ニ参
加シ郷土南西諸島ニ散ル又望
ム所ナリ
郷土又戦場ト化ス勝ツヲ信ジ
健斗ヲ祈ル
四月四日
父母上様 義徳

四月四日に書いた遺書

提供：知覧特攻平和会館



河口 守さん

西之表市上西 大崎 出身

昭和 12 年 7 月、現役兵として召集。

陸軍の第 6 師団輜重兵第 6 連隊に配属され中国に渡り、北支から中支を転戦。

昭和 18 年 ブーゲンビル島に派遣。

昭和 19 年 4 月 15 日、ブーゲンビル島ニギタンで戦死。
 享年 28 歳。

右の写真は、戦地の河口さんから母親に送られてきた写真です。「賀家川橋」という橋の名前から、出征直後の昭和 12 年、北支を転戦していた頃の写真と思われます。

河口さんは戦地から家族に出した最初の手紙に、「馬の野戦病院の如き」部隊に所属していると書いており、任務で世話をしていた馬に乗っていると思われます。



昭和 12 年 9 月、馬と永定河を渡る
 出典『歩兵第四十五聯隊史』（1981 年）

特集

戦地からの 手紙

前のページで紹介した河口守さんは、昭和12年に出征して昭和19年に戦死されるまでの7年余りの間に、18通もの手紙を家族に宛てて送っていました。このたび、ご遺族からその手紙を資料としてご提供いただき、内容を解読したところ、遠い戦地で家族の

ことを思う、河口さんの優しいお人柄が文面を通じて伝わってきました。

また、河口さんの所属した第6師団輜重兵第6連隊が主に行動を共にしたと思われる歩兵第45連隊の動向と、手紙の出されたタイミングとを照らし合わせたところ、壮絶な戦闘をくぐり抜けながら手紙が書かれていたことが分かりました。

そして、この家族との手紙のやり取りが、厳しい戦地に身を置く河口さんの心の拠り所になっていた様子を、より強く感じることができました。



手紙・ハガキ

河口守さんが戦地から家族へ出した手紙・ハガキの一部。
出征から戦死までの約8年間で、18通の便りを出していた。

戦地から河口さんが家族に送った手紙やハガキ（一部）

陸軍 第6師団^{しだん} 第45連隊

第6師団（本営地は熊本）は、九州南部出身の兵隊で編成^{へんせい}された部隊です。歩兵第45連隊は、主に鹿児島出身者で編成されており、種子島出身者も数多く所属していました。

故郷の便りと慰問品が届く
出典『歩兵第四十五聯隊史』（1981年）



戦地からの 手紙① (一部抜粋)

□昭和 13 年 1 月 29 日
中支派遣■川部隊
稲葉部隊氣付 臨時病馬廠
(■：判読不能)

入営以来一回の文信も申上ず何とおわびの申様も御座居ません。

然し母上の事は一日も忘れた事は御座居ません。

不省私も此の国難の第一線に立つ事が出来まして私に取って此の上も無い名誉と勇躍第一線に向かひました。

十二年七月二十七日動員下令と共に勇躍征支の途に着きました。

八月中旬朝鮮經由及び満州を通り越して北支の方に行きました。

北支に居る事約三か月それから海路に依り大連を通り船中約二週間上海に上陸十一月二九日です。それから十二月二日上海を出発して南京に向ひ十四日南京に着きました。丁度前線の初隊が南京を落した時でした。

陥落当時の南京の状態は何とそのみじめな状態は筆や口には言われない状態でした。

それから約六日間南京に滞在し二三日に移動を始め南京より約三〇里南方揚子江沿岸の蕪湖と言ふ處に三日目に着きました。

唯今は此の蕪湖に駐屯、警備に着いて居ります。

(後略)

出征直後から河口さんは前線に送られ、中国各地を転戦しました。

ようやく蕪湖で一息つく時間ができ、1 通目の手紙を出せたようです。遠い戦地で、母親のことを心の拠り所にしていた様子が伝わってきます。

またこの手紙には、部隊の動向が地名や日付まで詳細に書かれています。この手紙の封筒には「検閲済」の印がなく、何らかの理由で検閲を受けずに済んだので、こうした内容を送ることができたものと考えられます。

1937 7 月 7 日
昭和 12 年 7 月 27 日

(盧溝橋事件。日中戦争はじまる)

第 6 師団に動員下命が下る

・河口守さん現役兵として召集

8 月 1 日

鹿児島を発つ

8 月 6 日

門司港を経由して釜山に上陸

8 月 26 日～

北支各地 (下馬嶺～固安城～保定城～正定城) を転戦

11 月 20 日

(日本が宮中に大本営を設置)

12 月～

上海から南京へ。南京陥落

12 月 23 日

蕪湖に駐留。出征以来、初の後方任務

1938 1 月 29 日
昭和 13 年 4 月 1 日

・戦地からの手紙①

(国家総動員法公布)

7 月～11 月

中支各地 (安慶～黄梅～広済～田家鎮～漢口) を転戦

12 月～

漢口陥落

武昌に入り、警備にあたる

第 6 師団 歩兵第 45 連隊のできごと

戦地からの 手紙②

□昭和 14 年 1 月 3 日
ちゅうしはけんいなばふたいきつけ
中支派遣稲葉部隊氣付
高屋部隊野口隊

長らく御無沙汰致しました。

御変りなく御過しの事とは存じますが如何ですか。

小生相変らず元気、大元気で奮闘して居ります。どうぞ御安心下さい。

別に申し上げる事ありません。

唯一生懸命御奉公を以て御答へします。寫真二葉送ります。御笑覧下さい。

帽子を脱げば三分の一は禿げて居る事を思いつつ見て下さい。

(禿げぶりは父上の寫真とよく似て居る、間違いなしのおやちのがきらしい ハハハハハ・・・)

政子始め子供は皆元気ですか。お伺ひします。よろしく傳へ下さい。

極寒の砌、御自愛第一に。

では又 守

母上殿

追伸 去る十二月一日 曹長に進級致しました。

銃後皆様の御後援を深く感謝して居ります。

(文中の「政子」は、河口さんの異父妹にあたる。)



陣地構築

出典『歩兵第四十五聯隊史』(1981 年)

日中戦争の節目となる、武漢攻略戦が落ち着いたところで、2 通目の手紙が届いています。

冗談を交えた明るい内容になっていますが、この手紙以降は検閲を受けているので、任務の詳細は書かれていません。

1939
昭和 14 年

1 月 30 日
3 月～7 月
9 月

11 月 7 日
11 月下旬

1940
昭和 15 年

1 月 24 日
3 月 30 日
5 月 14 日
9 月 27 日
10 月 18 日

1941
昭和 16 年

5 月 8 日
6 月 4 日
8 月 8 日

・戦地からの手紙②

南昌～通城に進軍

(第二次世界大戦はじまる)

・戦地からの手紙③

武昌に本部を置き、陣地を構築

・戦地からの手紙④

・戦地からの手紙⑤

・戦地からの手紙⑥

(日独伊三国同盟締結)

・戦地からの手紙⑦

・戦地からの手紙⑧

・戦地からの手紙⑨

・戦地からの手紙⑩

戦地からの 手紙④

□昭和 15 年 1 月 24 日

中支派遣町尻部隊氣付

高屋部隊本部

一筆御便り致します。

母上には、御変りも無く目出度く二千六百年の新春をむかえ迎へられし事と遠察致します。

暫く御無音致しましたが不省守も相変わらず大元氣で目出度第三回目の意義ある新春を迎えました。御安心下さい。

去る師走の中旬より〇〇方面に行動して居りました。元旦にも〇〇の野に於て初日の出を拝した次第です。先達歸隊致し今やうやく落着いたところです。幸にして大元氣で〇〇より歸りましたから御安心下さい。

戦地は一昨々日（十九日）が初雪でしたが一寸降っただけで大したことはありませんでした。そのせいか當二、三日少し寒くなり零下五度位を上下して居ります。

内地は相當寒い事でしょう。

政ちゃん始め皆元氣ですか。もう相當大人になってゐる事でしょう。よろし宜敷くお傳へ下さい。

尚、政ちゃんのお父さんにも宜敷くお傳へ下さい。

又佐世保、神戸、種子島の人々も皆元氣でしょうか。若し母上よりお手紙を出される時は守よりも宜敷くと言ふ事をお傳へ下さい。

折を見て近い中寫眞を送ります。今日はえて失礼します。充分御体に注意下さい。元々強い体で無いかなるべく無理をしない様にして御働き下さい。

ではえて失礼します。さようなら。

母上殿 一月二十四日 守より

この頃から日中戦争が泥沼化し、早期決着から持久戦へと、戦略が方向転換されました。世界に目を向けると、ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まりました。

河口さんの部隊は、南昌作戦などを終え、つうじょう通城に本部を構えました。駐留する陣地の構築や訓練の合間に、およそ 2 か月に 1 通のペースで手紙を出しています。

この手紙では、作戦を行った地名は「〇〇」と書かれ、伏せられていました。

戦地からの 手紙⑦

□昭和 15 年 10 月 18 日

中支派遣町尻部隊氣付

高屋部隊本部

母上、長らく御無沙汰致しました、すみません、おゆるし下さい。守も相変らず大元氣です。毎日軍務に従事して居ります。どうぞ御安心下さい。

先達神戸の伯母殿より手紙を戴きましたが、書面に依りますと政子のお父さんが病氣中にて身動きも出来ない様な重態の由、始めて伺いました。自分のふこころえ不心得の疎遠から今まで存せず見舞も申し上げなかった事を残念に思っています。其だ相済みません。親不孝者と御立腹下さい。

母上もさぞ御心配の事と思います。元来あまり丈夫な体でもないし又母上が病氣にかかれはせぬかと心配して居ります。自分が若し内地に居たらと思ひますが然し大君の為でて居りますればやむを得ません。

誰か西之表からでも来てもらって加勢してもらって下さい。元氣まかせにあまり無理をして二人共同床に倒れない様にして下さい。

(中略)

それから勝手なおねだりですが、母上と政子の寫眞をお願いします。しかし寫眞は御ひまの時でよろしいです。

それから、後で守が賜った御賜の煙草を一箱送りますからお受取り下さい。

色々御見舞したいのですがあまり長くなりますから今日はえて失礼します。

くれぐれも御体を大切に、御働き下さい。

守は母上の御健康のみ念じて居ります。では皆様によろしく。

十月十八日 戦地より 守 母上

母親の元へ駆けつけたい河口さんの思いとは裏腹に、戦争はますます激化。この手紙の約 1 年後、河口さんの部隊は、長沙において激しい戦いをくり広げました（第 1・2 次長沙作戦）。

終わりの見えない戦争の中、日本は資源を求めて東南アジアに進出し、アメリカ・イギリスとの関係が悪化。昭和 16 年 12 月 8 日、日本はマレー半島への進出とハワイ真珠湾攻撃により宣戦を布告。太平洋戦争へと突入していきました。



戦地からの

□昭和 18 年 1 月？

手紙⑪

南海派遣
明第九〇二七部隊※
服部部隊

無事表記の部隊に於て、御奉公して居ます。

■御安心下さい。

今後御便りは此の宛名で御願います。

どうぼう
當方からは出せませんから宜敷く。

※手紙⑩以降は部隊名が、通称号で書かれるようになりました。
通称号は、漢字 1 字か 2 字の「文字符」と数字 4 桁の「通称番号」
を組み合わせた部隊の暗号名。第 6 師団の文字符は「明」。

河口さんの部隊は、昭和 17 年末、南方戦線に派遣されることが決まりました。この手紙は、派遣されたブーゲンビル島に着いてすぐに出されたものと思われ、取り急ぎ、手紙の宛先を知らせるだけの内容になっています。しかも、「当方からは出せない」と伝えていることから、これから先の戦いが厳しいものになると予想しているような緊迫感を感じます。

上海を出航する前には、「一度大陸を去れば再び生きて故国の土を踏むことはないものと覚悟し、夫々遺髪を形見として故国に送った」そうです。

参考『歩兵第四十五聯隊史（1981 年発行）』

1941 昭和 16 年	9 月 3 日	第 1 次長沙作戦
	12 月 8 日	(太平洋戦争はじまる)
	12 月 13 日～	第 2 次長沙作戦 (フィリピン、インドネシア等を占領)
1942 昭和 17 年	5 月 30 日	浙贛作戦 (第 1 期作戦)
	6 月	(ミッドウェー海戦で日本海軍が敗北)
	6 月 25 日～	浙贛作戦 (第 2 期作戦)
	8 月 27 日	武昌に帰着。戦闘訓練
	12 月 21 日～	上海を出航。行先は、ガダルカナル島。
1943 昭和 18 年	1 月 11 日	中継地のトラック島に到着。
	1 月 15 日	行先がブーゲンビル島に変更され、出航。
	1 月 21 日	船団の一部が雷撃を受け沈没→救助のち上陸
	1 月？	・戦地からの手紙⑪
	2 月 3～23 日	第 1～3 大隊が分かれて島を警備
	2 月 7 日	(日本軍、ガダルカナル島から撤退)
	2 月 21 日	・戦地からの手紙⑫⑬
	5 月 28 日	・戦地からの手紙⑭
	6 月 23 日	・戦地からの手紙⑮
	8 月 18 日	・戦地からの手紙⑯
	9 月 10 日	・戦地からの手紙⑰⑱
	11 月 1 日	米軍がブーゲンビル島タロキナに上陸
	12 月 28 日～	第 1 次タロキナ作戦
1944 昭和 19 年	3 月 8 日～	第 2 次タロキナ作戦。連隊はほぼ壊滅
	4 月 15 日	河口守さん、ブーゲンビル島ニギタンで戦死

戦地からの
手紙⑬

□昭和 18 年 2 月 21 日
南海派遣
明第九〇二七部隊
服部部隊

まさちゃん、元気で毎日^{がっこう}学校に出ていることでしょう。
兄さんも元気です。
まさちゃんの思っ^いてゐないような南の大きな木のある
山の中にゐます。
やしの木、バナナの木、パパイヤの木、めづらしいも
のばかりです。
大きなとかげも居ます。此の前はそのとかげを^えとらへ
て食べました。
今から時々南の面白いことをお知らせします。今日は
これでしつれいします。
お母さんのことをよくきいて、べんきょうしなさい。
さよなら。

河口さんの部隊は、ブーゲンビル島に上陸後、分散して島内の警護にあたりました。米軍はこの頃、ガダルカナル島から日本軍を撤退させ、ソロモン諸島を次々と攻略し、徐々にブーゲンビル島に迫っていました。

米軍がブーゲンビル島に上陸するまでの間に、河口さんは母親と妹に、手紙を出しています。

これは、妹の政子さんに宛てた手紙で、ひらがなを多く使い、優しい言葉で書かれています。
^{しょくりょう}食糧の補給が充分に得られていないのか、大きなトカゲを捕まえて食べたことも書かれています。

戦地からの
手紙⑱

□昭和 18 年 9 月 10 日
南海派遣
明第九〇二七部隊
服部部隊

七月十日の母上よりの、七月二十三日の政子、敦子殿
よりの親子三人よりの^{それぞれ}夫々の御便り今日一緒に受取り
三通共^{いず}何れも懐しく拝見しました。母上始め政子達^{ならび}並
に親類皆様も御変りなく御元気との事何よりと安心し
喜んで居ります。
^{こと}殊に母上の御健康は昔の弱かった時の事と思ひ比べると不思議な様にも思われ、守としてこんな嬉しい事は
ありません。
尚、政子等姉弟の元気な事母上もさぞ御安心の事と思
ひます。
守も政子等の将来の成長ぶりを想像し頼もしく思っ
て居ります。
今後共^{とも}親子共々くれぐれも御体を大切に御働き下さい。
それから無理なおねだりですが親子四人の^{しゃしん}写真があり
ましたら送って下さい。それに西町の祖母殿の分も入
れられたら一緒におねがいします。守も^そ其の後変りな
(く)元気で無事御奉公に精勤して居りますから、どう
ぞ御安心下さい。^{おおびろ}大廣野^のの祖父よりも今日便りがあ
り元気との事安心して居ります。今日はこれで失礼し
ます。西町、神戸、佐世保の皆様にもついでの時に
よろしく。ではさようなら。

これが、河口さんからの最後の手紙となりました。

ブーゲンビル島に配置された各部隊では、マラリアなどの病気に苦しめられながらも、ジャングルの中に道を切り拓き、米軍の上陸に備えていました。この頃日本軍は制空権を失い、前線に物資を送る船舶も不足していたため、食料等の補給も途絶えました。河口さんが手紙の中で「無理なおねだり」と言った家族の写真は、おそらく手元に届かなかったと思われます。

11 月 1 日、米軍がブーゲンビル島のタロキナに上陸。その後、米軍がタロキナに建設した飛行場を奪取すべく、日本軍は「第 1 次タロキナ作戦」、「第 2 次タロキナ作戦」を決行しますが、圧倒的な米軍との兵器装備の差を前に、日本軍は壊滅状態となりました。

河口さんの戦死日は、4 月 15 日となっており、第 2 次タロキナ作戦（3 月 8～22 日）の激戦の後、撤退した先のニギタンで亡くなったと考えられます。

※大廣野 西之表市上西地区の地名



河口さんの妹の米澤政子さん(93歳)が、企画展を見に来てくださいました。河口さんの手紙には、たびたび政子さんの名前が登場し、とても可愛がられていた様子が伝わってきます。

戦地の河口さんからタバコが送られてきた話（戦地からの手紙⑦）や、大崎の河口家に馬を見に行った話を政子さんから聞いた事があると、甥の裕介さんが話してくださいました。

2. 種子島で過ごした戦中・戦後

〈戦争体験者の証言〉



射場 利雄さん (94歳)

ばんやみね

西之表市古田 番屋峯

取材日 2025年5月1日

父盛市さん

戦死後の暮らし

「親父が昭和13年に戦死して（8ページ）からは、子どもが自分も含めて5人おったもんで生活は苦しかったなあ。自分たちで作った米は軍に供出しなければいけなかったから、カライモを食べて、漬物を食べて、どうにか生活していました。母はなりふり構わず乳もさらけ出して、必死に働いていました。」

農兵隊※のできごと

「私は子どもの頃から片耳が聞こえなかったから、兵隊には志願しませんでした。母も父を亡くしているから、志願してまで戦争に行く必要はないといって出させなかったし、受けても受からなかったでしょう。」

当時農兵隊という県の組織があった、鹿児島県中いろんなどころから人を集めていたので、私はそこに行きました。高等2年の卒業式もしないで、同級生4人で串良くしらの農民道場というところに行きました。

当時は、鹿児島にも米軍のグラマンがどんどん空襲に来る頃でした。ある日、私の小隊が串良の細山田というところの、木も何もない、一面カライモ畑というところに草取りに行かされてね。その日に限ってグラマンがちょうど来て、5、6人で作業をしていたら、その5、6人めがけて機銃掃射してきたなあ。グラマンが来る方と反対側の畑の土手に隠

れ、グーッと旋回してきたら、また反対の土手に隠れて、というようにして、どうにか機銃掃射は当たらないで、グラマンはそのまま去っていききました。しばらくしてから上官が走ってきて『助かったか!?』と声をかけてくれました。

それが15歳の時、今の中学3年生の時の話です。終戦になって、帰ってくるのができました。」

※農兵隊 太平洋戦争末期に政府が食糧自給体制強化と農業後継者養成の目的で組織したもので、正式名称は「食糧増産隊」という。

古澤 勝さん（85歳）

西之表市西之表中目

取材日 2025年4月28日

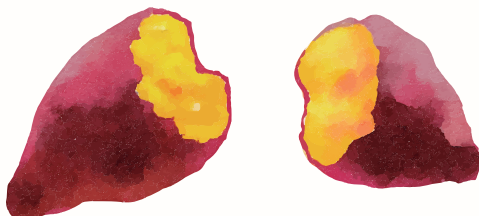
戦争孤児になって

「私の父は、鹿屋^{かのや}海軍航空隊の一員で、沖縄戦で戦死しました。『誰か沖縄に行く者はいないか』と言われて『はい!』と真っ先に手を挙げたそうです。」

当時母と私は長崎県佐世保市針尾島にいて、佐世保で大空襲にも遭いました。しかし母も昭和20年に亡くなってしまい、4歳で戦争孤児になりました。父親の実家のばあちゃん^{ばあちゃん}が、長崎まで迎えに来てくれて、一緒に宮崎に行きました。その時私は、栄養失調でお腹も膨れて、できものができて死にかかっていたんです。だから、学校も1級下の学年に入りました。

昭和25年、私が10歳の時に、父親の姉さんが種子島にお嫁に行くことになったので、一緒に連れてきてもらいました。種子島に来る時には、橘丸という350トンの船で、7〜8時間かけて来ました。

当時、東町に酒井屋の店があったので、その前に白い服を着てギターやアコーディオンを弾いている傷痍^{しょうい}軍人がいっぱいいました。本当の傷痍軍人でない人もいたと思いますが、そういう人たちがゴム紐売りとかをしていました。戦後の混乱した時代でしたね。そんな中、私は種子島に来て、カライモを食べて、どうにか今まで生き永らえることができました。」



戦後の話

「芋を作る時に、畑を掘れば焼夷^{しょうい}弾の薬莢^{やっさい}が出てくるので、空の薬莢を集めて遊びました。不発弾も

あったから、それで指が吹き飛んだ人もいました。」

宮崎のダム建設に働きに行った時には、作業員の中に元軍人さんもたくさんいて、『私はラバウル海軍航空隊の生き残りです』とか、『パレンバンに落下傘^{ちうかさん}降下しました』とか、『ソ連国境でソ連の戦車隊と戦いました』という人もいました。

榕城^{ようじょう}小学校の用務員として勤めた時、中庭の木造の宿直室の欄間^{らんま}には、米軍の機銃掃射の穴が2つ開いていました。まだあちこちに戦争の傷跡がありましたよ。

私が懐メロ同好会を作った時には、私よりも10〜20歳年上の人たちもいて、弟をおんぶしたまま機銃掃射から逃げ回って墓石ごと崖から転げ落ちたとか、アメリカの銃撃で母さんが殺されたとか、そんな話をたくさん聞きました。そんな話をする人も、みんないなくなってしまうなあ。」

池亀 カヅエさん（99歳）

西之表市東町

取材日 2025年5月20日

池亀さんは、15歳の時に太平洋戦争が始まり、19歳で終戦を迎えました。終戦を迎える昭和20年になると、種子島もたびたび空襲の被害を受けました。青春時代を戦時下で過ごした池亀さんが、目の当たりにした当時の種子島の様子を語って下さいました。

西之表の空襲

「私の父も母も東町の人だったから、田舎に疎開するところがなくて、東町に留^{とど}まっていました。父は鉄工所勤めでしたが、軍の車の修理などをする役目で現地召集され、弟は予科練[※]に行っていたので、家に残っていたのは私と母と、父のお母さん、女きょうだいの、女ばかり6人でした。

私の家の前の一軒家は、家の人が住吉に疎開していて空いていたので、その家の床下を掘って防空壕を作りました。町の人達は防空壕がなかったなので、隣近所の人たちにも「入れてくれ」と言われ、一緒に掘るのを手伝ってもらい、みんなが入っていました。

昭和20年3月18日、女学校を卒業した頃に、西之表が初めて空襲に遭いました。昔の農協組合（現・ホテルニュー種子島）付近から松浦金物のところまでが、空襲による火事で燃えました。鉄筋の2階建てはその建物だけだったから、狙われたのだと思います。

私と妹はどんなふう逃げたか思い出せませんが、ただただ飛行機の音に気を取られながら、小牧の竹やぶに逃げました。竹に弾が当たれば逸^もれると言われていて、そこには20人くらいの人が集まっていました。その後、焼け出された人たちが納曽公民館に移りました。

いなくなった人の畑から、男の人们が野菜をとってきたり、誰もいない家の台所から「もらっていくか

らね」と言って塩や醤油をもらってきて、女の人が煮炊きをしました。あの頃はみんな生きていくことに必死で、泥棒も警察ありませんでした。食器もないので、シャニン（月桃^{とうもろこし}）の葉に握り飯と漬物を乗せて食べていました。

家と一緒にアルバムもすべて焼けてしまったので、自分の小さい頃の写真は何もありません。

疎開していた人たちは、自分の家や町が焼けるところを見ていませんが、私は実際に空襲に遭って、この目で見ています。グラマンがB29⁹か、音を聞くだけで分かるようにもなりました。空襲の後、町が焼け野原になって、普通なら見えないはずの八幡様（八坂神社あたり）が、すぐそこに見えたのを覚えています。」

※予科練 「海軍飛行予科練習生」の略称。
志願した14～17歳の少年を対象に、短期間で海軍航空兵を養成した。

増田飛行場建設への動員

「増田の飛行場建設にも、同級生はほとんど行きました。窪地^{くぼち}を埋め立てるために他の山の土を持ってくることがありました。谷底にレールがあり、車に男の人が10人くらいで土を入れ、それを女2人でレールの上を押して運びました。運んだ先で、また男の人たちが待っていて、車を持ち上げて土を下ろす、ということの繰り返しでした。」

勤めに出ていても、当時はお国のためとなれば、職場も休みをくれました。『今度は私たちの班が行かなければいけなくなったから』と言えば、職場も『どうぞ』と2、3日休みをくれるものでした。」

鍋割への資材運び

「ながし時[※]に大工さんが外した東町公民館の床板を、東町から鍋割まで運んだこともありました。約12キロの距離を、私は床板を担^{かつ}いで運

び、他には柱を2本背負う人、食料を背負う人もいて、数十人の行列で歩いて行きました。」

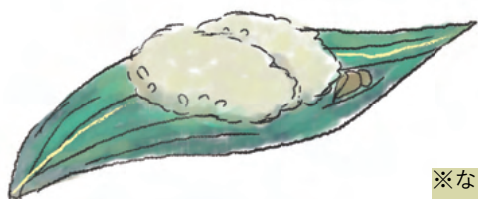
着いたのは空が見えないくらい鬱^{うつ}蒼^{そう}とした山の中で、そこに大工さんがいて家を作っていました。床に畳もなく、天井も半分以上開いているところに、ランプを吊るして10人くらいで2、3日寝泊まりをしました。川を中心に東町・西町・池田・洲之崎などと地域で分けられていました。川の一方では洗濯をして、その下流では米を研^といだりしていました。

また、他の地域の人とは話してはいけけないことになっていました。『なぜこんなところに家を作るのか』というようなことも、口に出してはいけませんでした。上からのお達しで、そう言われていました。後々、『あそこは集団自決するため場所だった』という人もいました。自分の墓づくりをしていたようで、思い出すと悲しくなります。」

辛かった戦後の後処理

「戦争が終わった時、日本軍が岳之田に隠していた弾丸の箱を、アメリカに渡さなければいけないということで、何十kgもある木の箱を紐でくくって肩に下げて、ずらっと行列になって歩いて運びました。どこまで運んだのか分かりませんが、日本兵とアメリカ兵が立ち会っていたのは覚えています。」

銃弾の木箱がとにかく重くて、途中で妹は泣いてしまっただけで、かわいそうでしたが、妹の分を持ってやることもできず、ただ歩きながら励ますことしかできませんでした。市街地の街並みが見えたときはうれしくて、私も自然と涙が出ました。」



※ながし時
種子島の方言で梅雨時のこと。

付録 太平洋戦争末期の

「鍋割」が持つ意味



「鍋割」は、西之表市と中種子町が接する中割校区の人里離れた山深い場所にあります。昭和19年夏以降、住民は「鍋割」での陣地構築などの作業に動員され、終戦直前には住民に対し「鍋割」に集まるよう指示が出たなど、さまざまな証言の中に「鍋割」という地名が出てきます。

さらに、「鍋割」は「集団自決」の場所だったという証言もある。

「鍋割」は、西之表市と中種子町が接する中割校区の人里離れた山深い場所にあります。昭和19年夏以降、住民は「鍋割」での陣地構築などの作業に動員され、終戦直前には住民に対し「鍋割」に集まるよう指示が出たなど、さまざまな証言の中に「鍋割」という地名が出てきます。

さらに、「鍋割」は「集団自決」の場所だったという証言もある。

「鍋割」に関する証言

「公民館の床板を、東町から鍋割まで運んだこともあった。」
(29 ページ)

「中野部落全体で、鍋割と言う奥地の大山の中に各々藁を背負うて行ったことがありました。」
(下村タミ子『戦争と私』)

『鍋割に避難せよ』と通知があり、家にあった銃・刀剣・火縄銃など全て海に捨て、米軍の上陸に備えた。」
(森友和『戦艦「大和」と種子島』)

「弟が亡くなったその日、古田（鍋割）に集まるように書かれた触れが届いたのです。」
(41 ページ)

「鍋割」周辺の地図



上妻 忠昭さん（86歳）

西之表市西之表納曾

取材日 2025年6月10日

叔父のこと

「私の叔父は、種子島で教員をしていましたが徴兵され、広島にあった^{あかつき}暁部隊※に配属されました。叔父が入隊する前に、神戸に立ち寄ってくれた時の写真が残っています。真ん中にいるのが叔父で、左前にいる子どもが私です。

叔父は、高射砲をつけた民間の貨



物船に乗り、フィリピンのレイテ島に物資を運ぶ任務に就いていた時に、敵軍からの攻撃を受け、船は沈没してしまいました。叔父の遺骨は、帰ってきませんでした。」

※暁部隊 戦時下の軍隊・物資等の船舶輸送を行った陸軍船舶部隊。司令部は、広島県宇品。

上妻さんは昭和14年（1939年）に神戸で生まれ、戦時下を神戸で過ごしました。終戦時に6歳だった上妻さんが経験し、記憶に残っている戦争の様子を語って下さいました。

神戸での空襲体験

「神戸には軍港や戦闘機を作る工場、海軍の飛行場もあったので、終戦までに非常に多くの空襲を受けました。神戸の住宅街には防空壕がなく、とにかく逃げ回るしかありませんでした。飛散物を避けるため、側溝に飛び込んで上から布団をかぶったこともあります。」

神戸の6月の夜の空襲では、あちこちで建物が燃え、真昼のような明るさになりました。父は国鉄で車掌をしていたので不在にしており、母は子ども3人を連れて、街が燃える中を逃げ回りました。翌日、父と会うことができた時に、とてもホッとしたのを覚えています。この空襲で、住んでいた家と周辺の家屋は、すべて燃えてしまいました。それから終戦までの間、どのように生活していたかは、トラウマになっているのか、

全く思い出せません。」

戦後の大変さ

「終戦後、父の故郷の種子島に帰ることになりました。まだ汽車も動いておらず、焼け跡から探してきたリヤカーに兄弟3人を乗せて、父と母は歩いて鹿児島まで来たのです。帰っている途中、どこかで食べた白いご飯とみそ汁がすごく美味しかったことが、今でも忘れられません。」

当時は、鹿児島市から種子島までの船も小さく、便数も少なかったもので、船に乗れるまで何日か鹿児島で待機していたと思います。父は、種子島で慣れない農業を始めましたが、しばらくは食べ物もなく、悲惨な生活でした。着るものもないので、母が作ってくれました。小学校もほとんどの子どもが裸足で通っていました。

戦後の貧しさは種子島だけのことでなく、日本中で同じような状況でした。こんな状況を作るのが戦争です。決して戦争はしてはいけません。」

川畑 光徳さん（89歳）

イツエさん（89歳）

西之表市安城 平山

取材日 2025年6月13日

疎開の思い出

「小学4年生の時に、伊佐方面に疎開することが決まりました。安城あんじょうから西之表まで、空襲に遭わないように、夜に歩いて移動をしました。安城だけで100人以上（実際は151人）いたと思います。」

西之表からは金戸丸という船に乗り、翌朝鹿兒島に着きました。鹿兒島からは汽車で伊佐方面に向かい、夕方ようやく菱刈に着きました。着いたところに集落長がいて、平山集落の子どもたちだけ連れて行き、児童に番号をつけた後、疎開児童を受け入れる家庭がクジを引いて、割り当てを決めました。

私（光徳さん）がお世話になったのは、下宿をしているおばあさんの家でした。私その他に、若い郵便局員が2人下宿をしていて（1人は枕崎出身）、その人たちと一緒に寝て

昭和20年4月、種子島の小学2～6年の全児童を県本土に疎開させることが決まり、西之表市からは2、838人の児童が大口・菱刈ひしかり方面（現・伊佐市）に向けて出発しました。

小学校の同級生だった川畑さんご夫婦は、菱刈に疎開した時の様子や、帰りの船で遭難したことなどを、おふたりで語って下さいました。

いましたよ。ごはんも食べさせてもらって、親切にしてもらいました。

3か月くらいたってから、受け入れ家庭によって丁寧に扱ってくれる家と炊事洗濯をさせられる家と、待遇に差があることが分かり、公民館で集団生活をするようになりました。集団生活が始まってからも、お世話になっていたおばあさんの家に立ち寄って、いつも食べ物をもっていました。しばらく顔を出さないと、「お前が来ないから腐ってしまっ

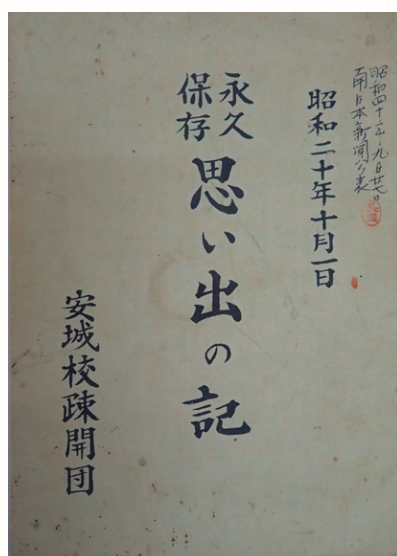
た。ここを通って行きなさい。」と言われたので、2、3日おきに行っていました。優しい人でした。

集団生活になってからは食料が不足し、川でセリやフキを採って雑炊にして食べました。」

絶望の漂流と

希望の地・枕崎白沢

「種子島に帰ることになったのは、終戦から1か月くらい後でした。汽車で帰ろうにも、鹿兒島が空襲でやられていて汽車が使えず、竜ヶ水りゅうがみづから先は荷物を背負って鹿兒島まで歩きました。鹿兒島は焼け野原で、山形屋だけが残っていました。洲崎小学校に数日泊まった後、昌丸まさまるという木造貨物船で帰ることになりました。安城小学校の児童全員と、復員兵も数名乗っていました。」



「思い出の記 安城校疎開団」

菱刈での疎開や帰島時の船遭難の思い出を疎開児童の引率責任者であった長野菅彦氏が昭和40年にまとめ発行したもの



国上の喜志鹿崎が見えてきたところ
で、船が故障しエンジンが止ま
り。船は浸水を始めました。船が沈
まないように荷物は海に捨て、復員
兵が必死に水を汲み出してくれまし
たが、エンジンは直らず、船は漂流
を始めました。最後は腰のあたりま
で水につかり、もし助からなくても
見つけやすいようにと、死を覚悟し
てお互いの体を5人くらいずつ紐で
結び合いました。女の子たちはモン
ペの紐を結び合い、兄弟や姉妹は一

緒に見つかるようにと、一緒に結び
ました。4日船に乗っていて、食べ
たものは小さな握り飯一つでお腹も
減っていました。みんなあきらめ
て夜になると寝てしまいました。
明け方になると『島が見えた！』
という声が出て、みんな歓声を上げ
ました。復員兵2人が岸まで泳いで
助けを求めに行き、漁船がやってき
てようやく助けてもらうことができ
ました。着いたのは、枕崎の白沢と
いうところでした。

陸に上がってもフラフラで歩くこ
とができず、とにかく喉が渴いてい
たので、砂浜に流れている水をみな
な夢中で飲みました。白沢の人たち
が、カライモ（さつまいも）を担い
棒で持ってきて、公民館で煮てくれ
ました。海に捨てた荷物は流れ着い
ていましたが、船は沈没したようで
した。」

その後、安城小学校の児童は、
昭和20年10月1日に種子島に
帰り着きました。

後日談

戦後60年目に、他の疎開経験者と
共に13名で枕崎の白沢を訪ねた光徳
さん。すると、光徳さんの宿泊先に、
伊佐の下宿先で一緒だった枕崎出身
の元郵便局員の方が訪ねてきてくれ
たそうです。当時一緒に撮った白黒
写真も持ってきてくれて、非常に懐
かしかったということでした。

2021（令和3年）6月

九七式艦上攻撃機 引き揚げ

機体の存在を知る地元漁師らの話をも
とに、林哲郎氏が独自に調査を始めた。
2015年秋に機体を喜志鹿崎沖で発
見、国の行う戦没者遺骨・遺留品調査に
より引き揚げられた。

提供：林哲郎氏



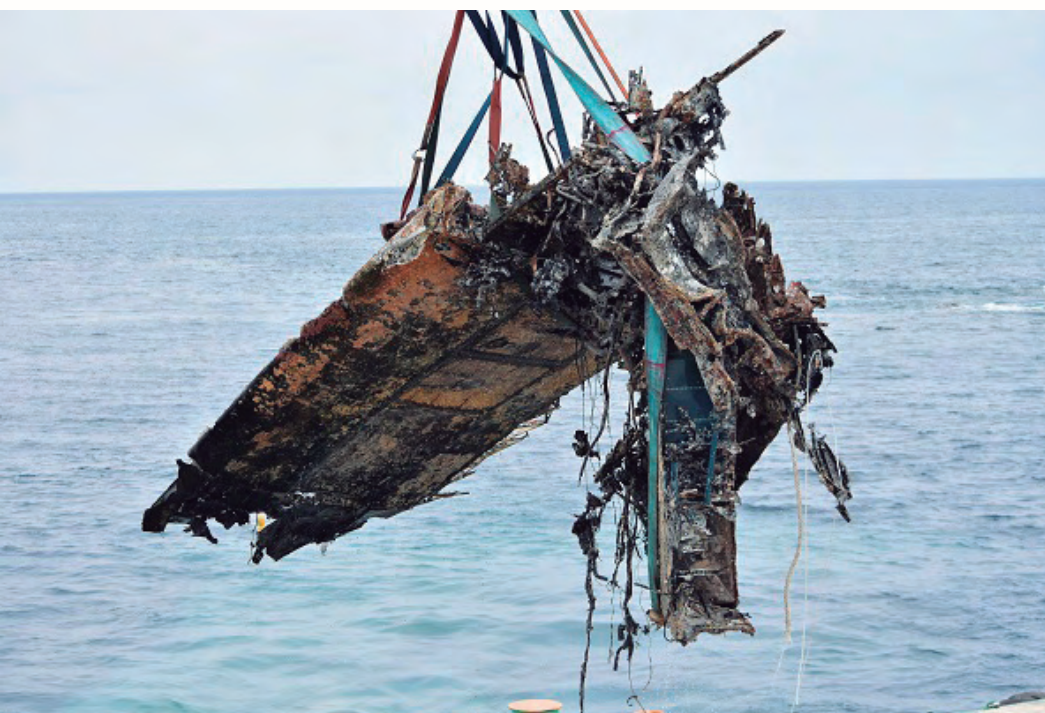
機体から見つかったスパナ（右）、
魚雷止め（左上）、ペンチ（左下）

九七式艦上攻撃機 （九七艦攻）

昭和12年（1937）
に日本海軍に採用され
た航空母艦搭載用の3
人乗り攻撃機で、昭和
16年12月8日の真珠湾
攻撃では主力を担っ
た。

太平洋戦争の末期に
は旧式化し、昭和20年
（1945）4月から
始まった沖縄航空作戦
では、串良航空基地（鹿
屋市）から出撃した『特

攻機』にも一部使用さ
れた。これまでアメリ
カとイギリスの博物館
で機体の一部が確認さ
れ、日本では大分県宇
佐市平和資料館でプロ
ペラ部分が展示されて
いる程度で現存資料は
少ない。
機体の形式は、中島
製（B5N）の一号機と
三号機、三菱製（B5M）
の二号機があり、喜志
鹿崎沖で発見された機
体は「中島製の三号機」
であることが確認され
ている。



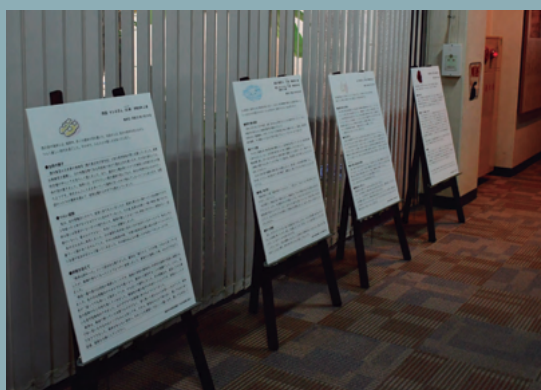
特別企画展

「つながる記憶、未来へ」

展示風景

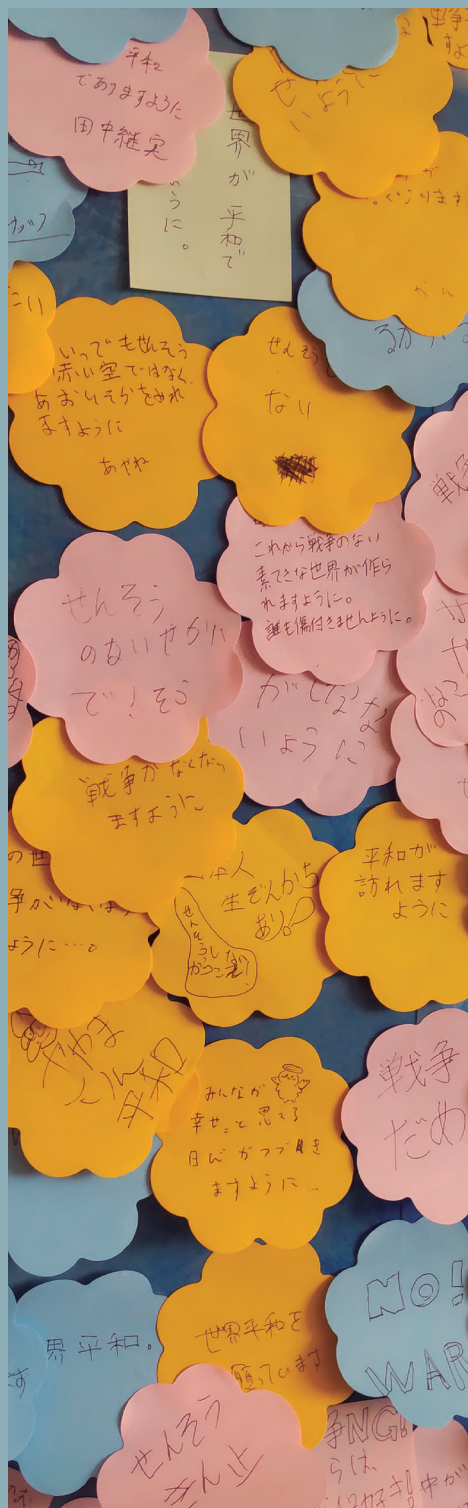


戦後70年特別展からの証言
も数点展示しました。



同時開催された
ミニ企画展 in 西之表市立図書館
千人針や帽子、長野操さんの詩のコピー
等の展示、戦争関連の本の紹介スペース
を設置していただきました





戦争から時が経ち、実体験を語れる方は減っていく。知らないで終わらせてはならない。伝え続けていく。

平和になる為には
沢山のギセイがあったんだな
ギセイのない世の中にしよう

二度と戦争が起こらない、
起こさないことを祈ります
子どもたちの
しあわせな未来のために！！

戦争を知る事が後世の平和に
つながっていくのだと思います。

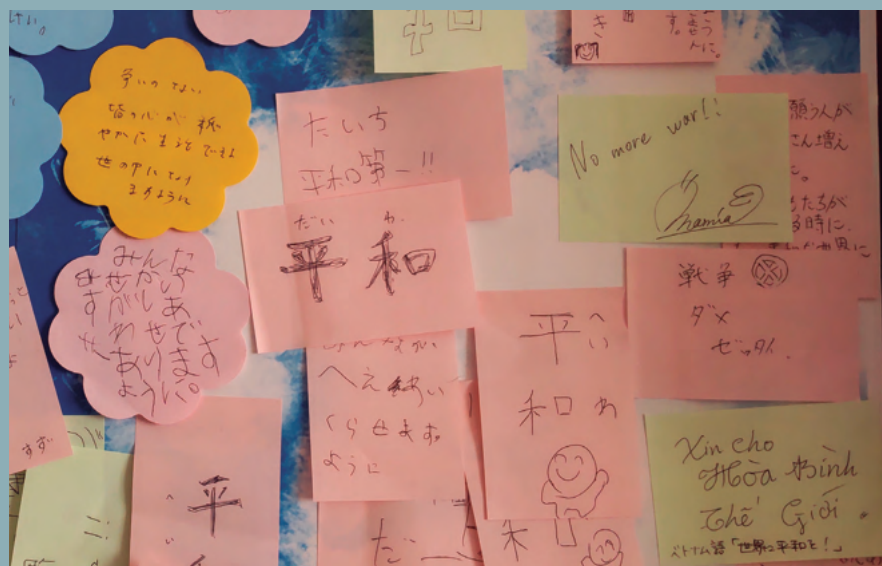
知ること、学ぶこと、
感じて考えること、
平和のために努力し続けたい

へいわをべんきょうして
せんそうしません！

2人の息子の母として戦地から送られた手紙を読むと胸がいっぱいになります。
どの国の人でも、子供を戦地に送ることはしたくないはず。
一刻も早く、今世界で続く争いも止めて欲しい。
自分にできることを考えたいと思います。

だれもがきずつかない
世界になるように

メッセージボードには多くの方が思いを寄せてくださり、貼りきれなくなるほどのメッセージが集まりました。皆さんから寄せられた言葉の中から、いくつかをご紹介します。



3. 戦後70年企画展

「記憶く失のう前に聞かしようわい」より

戦後70年にあたる2015年に、鉄砲館で聞き取りを行った戦争体験の証言集です。この10年の間に亡くなられた方も含まれており、貴重な記録となっています。



上妻 敏彦さん (79歳)

疎開当時 住吉小学校4年生

羽島 宜夫さん (78歳)

疎開当時 住吉小学校2年生

取材日…平成27年7月3日

疎開前の住吉で

皆が防空壕へ避難しているときに、敵機から機銃掃射される中を、落ちてくる葉莢^{やつきょう}欲しさに駆け回る男児が結構いました。葉莢は珍しい金属製品だったので、加工して遊び道具（指輪とか釣具など）にしてみました。「撃たれたら死ぬ」という意識がなく、戦争が怖いものという感覚はありませんでした。

疎開決定の報せを受けて、嬉しさのあまり小学校の校庭を走り回りました。何しろ住吉という土地から出たことがない子どもばかりで、大きな船はもとより汽車に乗れるなんて夢のようでした。

昭和20年4月29日集団疎開出発。住吉小へ菱刈まで小舟、貨物船、貨物汽車にて移動。

菱刈の大きな公民館で1週間すごした後、集落ごとに別々の地域へ分かれることになり、「住吉中之町」の生徒は「小川添^{おがわぞえ}」地区の公民館へ移動、そこで6か月あまり集団生活を行った。

疎開先にて

出発時の服装は国民服、ズボンで、靴はなく裸足でした。下着などもなくズボンは直ばきです。菱刈に着いたときは種子島との気温の差を強く感じ、とても寒かったのを覚えています。

本城小学校^{ほんじょう}へ通って合同で授業を受けていました。本城小は小さな小学校で2階建ての建物を見たのは初めてで、学校の備品である野球道具、剣道道具も珍しくて仕方ありませんでした。

出された食事は少なく、お茶碗に極僅かな白米、うすい味噌汁（具は里芋の欠片ひとつ）くらいでした。なので、腹が減って腹が減ってしょうがなかったです。ある時は、バラ

カス（大豆油の搾りかす、牛のエサ）が1袋公民館に置いてあったのを食べました。牛のエサとはいえ食えるものに変わりはありません。バラカスを頬張り、水をたっぷり飲むと、とりあえず腹はふくれました。牛のエサにまで手を出す子どもを哀れに思ったのか、公民館にバラカスの入った袋ごと置いてくれたのは農協の人の厚意だったのではないでしょうが。

当時は、赤痢が流行っていました。が、葉はありませんでした。実際、赤痢で住吉小の児童が1名亡くなっています。「食」に関しては、厳しくしていた先生の言い分も分かりますが、とにかく腹が減って飢えていました。

親の手伝いなどで畑仕事や田植え

の経験のある上級生(特に農家の子)は、地元の人々の農作業の仕事へ呼ばれ、そこで賄いを御馳走になることができました。畑に関する知識があったので、食べて良いものといかないものとの区別ができ、畑に入っ
ては野菜などを盗んで食べていました。(時には、やりすぎて一晩柱に縄で縛られたことも・・・)

疥癬(かいせん)(ダニによる感染症)にかかった時に、湯之尾温泉に連れて行ってもらえました。痒さよりも温泉に行けたという喜びのほうが勝って、それだけは、楽しい思い出です。

種子島へ帰る

終戦となり帰島が決まりましたが、その道のりは険しいものでした。枕崎台風(昭和三大台風の1つ)の影響で川内川が氾濫し、菱刈駅は水没していました。ようやく菱刈駅から汽車に乗ることができたのは帰島決定から4日後でした。鹿児島市街地は空襲で一面焼け野原となっていたため、汽車は目的地に着けず、途

中の駅で止まり、そこから延々鹿児島港を目指して歩きました。鹿児島は破壊されており、水道の水が噴水のように吹き上がっていました。焼け残っていた小学校に泊り、やっと海岸へ到着したところ、住吉浜の町のポンポン船(漁船のこと。エンジン音がポンポンと聞こえたため)が数艘迎えに来ていました。走行中、ポンポン船は佐多岬の大きな波をかぶり、木の葉のように揺れて生きた心地はしませんでした。が、無事、住吉の浜に到着しました。

4年生と2年生

当時4年生の上妻さんは、ある程度自分で判断行動できるのに対し、最年少の2年生羽島さんは「拾い食いをしてはいけない、勝手に食べ物を取ってはいけない」という先生の教えを遵守していました。兵隊が捨てた残飯を見つけて(白米や缶詰があった)、「拾い食いはいけない」と、羽島さんは全く手を出せなかったのに対し、上妻さんは「食ったら

危ないか、大丈夫か」で判断していたそうです。

羽島さんの記憶では、住吉中之町の上級生は皆やさしく、いじめられたことはなかったと言います。上妻さんは疎開先の子どもたちに「たねごろー」とバカにされて悔しい思いをし、喧嘩していました。

帰宅した羽島さんの姿を見た家族は「あばよー!!こんなに痩せて、よく生きとったなーっ」と大変驚いたと言います。「拾い食いをしてはいけない、勝手に取って食べてはいけない」という教えを真面目に守った羽島さんは、本当の骨と皮だけになっ
ていました。一方、それなりにたくましく過ごしていた上妻さんは、他の子に比べると良く日に焼けて健康的に見えたため、厳格な祖母の疑いの目が痛かったそうです。

岩坪 トシ子さん（78歳）

疎開当時伊関小学校3年生

取材日 平成27年7月14日

戦時中の安城、そして疎開

安城はもとと多くの人が農業をしながら暮らしている穏やかな集落でした。しかし、昭和20年に入ると、安城の上空にも敵飛行機が飛び交い、空襲されるようになっていました。そのため安城小学校でも、小学2年生以上の生徒は疎開することになりました。当時、小学3年生の私も、菱刈に疎開しなければならませんでした。

疎開先へは、種子島高等女学校（現在の市役所の場所）に一度集合してから、出発することになっていました。安城から女学校へ向かう途中も、敵機がやってくる度に山陰に隠れたり、道に座ったり伏せたりしながら、それをやりすごしました。しかし、まだ小さかった私たちには疎開の詳しい事情がわからず、船や汽車に乗れるのを楽しみにし、遠足か

安城から菱刈へ。親元を離れた疎開生活。そして、種子島に帰る途中に起こった遭難。そんな厳しい環境の中で生きなければならなかった子どもたち。今となって思い出すことは、たくさんの人への感謝の気持ちだった。

旅行のような気持ちでいました。古田集落の平松あたりまで親など近親者が送ってくれたように思います。子どもたちとは違い、親たちは「これで生き別れになるかもしれない」という思いから、涙ながらの見送りでした。

疎開先での生活

無事に菱刈に着き、子どもたちは部落別に寺や公民館に集まりました。菱刈の宿所の方がくじを引き、当たった子をそのまま連れて行くことになっていました。しかし、兄弟がなかなか離れたがらなかったり、小さい子たちが泣いたりしたため、兄弟同士は近くの家に置いてもらうなどの配慮があったようでした。

私たち疎開児童は、菱刈の宿所を本当の家と思えと言われていまし

た。また、宿所の方には、受け入れた児童を自分たちの子として育てようという考えもあったそうです。しかし、すぐに馴染めるはずもなく、着いた日の夜は泣き明かしました。宿所には同じ年の子どもがおり、急にやってきた私を受け入れることはなかなか難しかったようです。喧嘩をすることもあり、宿所の方は気を遣ったことだろうと思います。

2か月くらいはそうして個人宅で過ごし、3か月目あたりから公民館での集団生活が始まりました。とにかく食べる物が足りず、私たちも内川の川縁にセリやナズナを採りに行くなど、学業より食糧調達を優先しなければなりません。保護婦さんたちは、採ってきた野草とわずかな米で薄い雑炊を作るなど少ない材料で工夫しながら、なんとか食べさせてくれました。

菱刈で過ごす間にも、敵機は飛ん

できていました。そのため、学校で安心して勉強することはできませんでした。少ない学業のための時間さえ、杉山の中や神社などで敵機に見つからないようにしながら、隠れて勉強していました。また、地元の子どもの中には、私たちを「疎開の子どもは・・・」といじめる子もいて、辛いこともありました。

帰島途中の遭難

そんな苦しい生活に耐え、8月の終戦を迎えました。やっと種子島の家族の元へ帰れることになったのです。船に乗るため、まず鹿児島市まで戻りました。鹿児島市の街は丸焼けになっていました。

なかなか動かせる船も見つかりませんでした。なんとか種子島まで行くことができる船を見つけ、安城から疎開していた私たちや引き上げの兵隊さんなどが乗り込みました。船は順調に航海しましたが、馬毛島に差し掛かるところで、船のエンジンが突然故障して止まってしまったのです。もうすぐ種子島に着くという喜びも束の間、私たちは、そこか

ら4日3晩漂流し遭難しました。

船の上では小さなおにぎりを食べたものの、それだけでお腹が足りるはずもなく、家族へのお土産だった素麺や乾パン、金平糖なども食べて飢えを凌ぎました。そのわずかな食べ物も、あつという間に底をつきました。水もなく、手に溜めた雨水をなめて、なんとか渴きを凌いでいました。

船は浸水が進み、油交じりの水がどんどん上がってきました。私たちは胸のあたりまで水に浸かり、どうすることもできず、ただ、「お母さん、助けて」「お父さん、助けて」と叫んでいました。

4日目には、皆、船は沈むと覚悟を決めました。荷物の中に残っていた乾いた衣類を集め、誰のものかは関係なく、分け合って身に着けました。それから、甲板の上で5人ずつお腹のところに縄で縛ってつないでもらいました。もし海中に沈んで死んでしまっても一緒に浜にうち上げられるように、また遺体を見つけてもらいやすいようにという準備でした。

そんな時、船から山影が見えたの

です。そこは枕崎市の白沢だったそうです。白沢の人たちは私たちの救助の求めに応じ、小さな船を何艘も出して助けにきてくれました。

感謝の気持ちを込めて

救助された時には立ち上がることはできない状態で、あと少し遅かったら命はなかったと思います。白沢の海岸に着いた時、赤痢が流行っているため水は飲むなど言われました。

しかし、のどが渴いていたため、砂浜を掘って顔を穴に突っ込むようにして飲みました。砂で濁った水でしたが、とてもおいしかったです。この水を飲んだ時やっと、本当に助かったんだと思いました。この遭難の体験の中で、私は水の一滴にもどれだけ助けられたかわかりません。現在ではそのように感じることはないでしょうが、どうか物を大切にして生きていつて欲しいと思います。そして、菱刈の人々、白沢の人々、命を救ってくれた人々に感謝をし、「ありがとう」と伝えたいです。

落合 浩英さん（80歳）

疎開当時 国上小学校5年生

取材日 平成27年7月14日

植物学者として安納いもの調査研究に心血を注いでいる落合さんは、元西之表市長である。自宅周囲に展開する「小さな植物園」には、何百種もの植物が育成されている。農家を継ぐしかない環境だった落合さんが、研究者（県職）としての道を歩むことになったのは、疎開先で教鞭を取っていた先生の言葉であつた。

小学校のころ

当時の国上国民学校は380人の生徒がいました。学校では、1年生の時に、名前書きや数を10まで数えることを教わり、3年生で掛け算や漢字を学びました。当時は、ひらがなよりもカタカナを先に学びました。放課後は、馬や牛の世話が日課でした。遊びとしては、メダマ（ビー玉）、カルタ、オハジキ、竹馬、ダクマ（手長エビ）すくい、トンボ釣りなどをしていました。

疎開先の環境

国上の疎開先は、伊佐郡西太良村でした。最初の2か月間は個人宅の西福寺にお世話になりましたが、その後4か月は消防ポンプ倉庫を改造した家屋にて集団生活を送りました。4畳半2間に児童約15人、保

護婦1人、教師1人が生活をしていました。

食事は麦飯、雑汁、いも、ダゴ汁、ふすま（麦の皮）、大豆かす、ユリの根、セリ、タケノコ、茄子、生梅などで、おかずは味噌汁、梅干し、漬物だけで、弁当箱の半分くらいの量しかありませんでした。入浴は週1回で、隣の家の風呂を借りるか屋外のドラム缶風呂で、洗濯は各自で行うことになっていました。不衛生な環境で皮膚病が蔓延し、赤痢も発生して1人が亡くなりました。シラミ、ノミにかまれて痒くてしょうがありませんでした。

曾木国民学校

最初の2か月は校舎で地元の子どもたちと合同で授業が行われていました。夏になると空襲が激しくなったため、すぐに山に隠れることがで

きるよう林間学校での授業を行っていました。荒瀬神社の杉林などで授業を行っていましたが、危険が迫ると避難用のタコツボ※に逃げ込みました。

曾木国民学校の生徒と合同で学んでいましたが、そこで気付いたのは、離島に住んでいるからといって自分の学力が劣っているわけではなかったことです。本土と比較しても勉強の遅れはなく、委員長にも選ばれました。しっかりと役目を果たすことができました。

種子島へ帰る

曾木国民学校で授業を行っていたのが、「永山一先生」です。私は、そこで永山先生に言われた言葉が人生を変えました。

「もう一度、鹿児島に出てこい」
「離島に住んでいるからということ

を引け目に感じることはない。世の中は広い。知性を磨き教養を広げ、視野を広く持てば、いくらでも羽ばたいていける」
と教えられました。私は、農家の子は農家を継ぐだけと思っていたので、永山先生との出会いは、今後の私の人生を大きく変えた出来事でした。

疎開で学んだこと

私は初めて親元を離れて、故郷・家族・両親の大切さや有難さを知ることができました。さらに、厳しい環境での人間のあり方を学びました。本土に友人もでき、特に永山先生と出会えたことは、本当に良かったです。また、平和についての認識が高まり、「戦争は絶対にしてはならない」と思います。

今の子どもたちに言いたいことは、「命の大切さ」。人は他の生命をいただいて生きているということですから。命は自分だけのものではありません。未来のために夢と希望を持ち、正しく、楽しく生きてほしいと思います。

※タコツボ 1人用の塹壕のこと

山下 和子さん(84歳)

終戦当時14歳

取材日 平成27年6月26日

「飛行機は間違はなく私を狙っていた」そう語る山下さん。
その場所は、私たちの住む西之表の城^{じょう}だった。
現在から想像もつかない実際にあった西之表の実話である。

空襲を受けた市街地

私が女学校(現：種子島高校)の2年生の時、勤労動員で増田飛行場に行きました。20〜30人でトラックに乗り合わせて飛行場へ行き、モッコ(運搬用具)で土を運ぶなどの勤労作業をしていました。勤労作業を終え西之表に戻ってくると、私の住む東町は空襲を受けた後でした。焼夷^{しょう}弾^{だん}ではなかったため延焼こそしていません。爆弾が数多くばらまかれており、家は滅茶苦茶に壊されていました。家族をはじめ近所の人々は城集落に避難していました。

大きなコの字型の横穴の壕を掘り、空襲があればそこに避難していました。いつ空襲があるかも分からず、恐ろしい毎日でした。

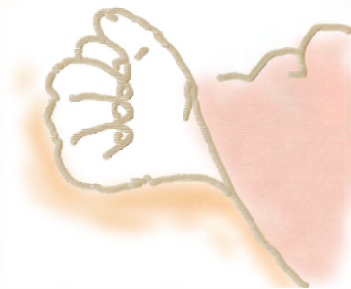
必死に逃げた

当時、母は妊娠中であつたため、私と祖父母で生活に必要なことのほとんどをしていました。

私たちが下の2人の小さな弟たちを連れ、谷に水汲みに行っていたとき、恐れていた空襲がありました。ちょうど私が谷の下まで降りていた時だったので、上った時には皆逃げたいて、私は取り残されてしまいました。弟の一人も背負って逃げなければならず、逃げ遅れた私を敵機は容赦なく狙いました。眼鏡をかけた飛行士の顔が見えるほど近い距離から狙われ、本当に恐ろしく、転がるように必死に逃げたことを覚えています。命からがら壕の中に逃げ込んだ時は、命が助かったと思い、本当にホッとしました。

母の出産、集団自決の覚悟

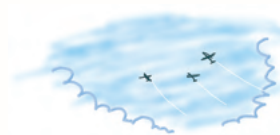
母は、壕の中で赤ん坊を生みました。私にとって末の弟でしたが、生後1週間目の8月14日に亡くなりました。しかし、私たちには悲しむ時間がありませんでした。弟が亡くなったその日、古田に集まるように書かれた触れが届いたのです。それは、「集団自決」を意味していました。死ななければならぬことが分かりながら出発の準備をしていました。しかし、翌日の8月15日、終戦の時を迎えたのです。



終戦を迎えて思うこと

終戦の知らせを聞くまで、日本が負けるわけがないと思っていました。しかし、知らせを聞いたとき最初に感じたのは、負けた悲しみではなく、戦争が終わったうれしさでした。もし、1日でも長引けば、みんな死んでいたかもしれません。

私の体験から言えることは、「戦争ほど怖いものはない」ということです。今の世代は、戦争の恐ろしさを感じる事ができないかもしれません。ただ、「やったらやられる」そのことだけは、若い人たちに絶対に忘れないで過ごしてほしいと思います。



武田 敏恵さん (93歳)

終戦当時23歳

平石 カツエさん (74歳)

終戦当時4歳(敏恵さんの娘)

取材日 平成27年6月26日

敵飛行機の襲来

昭和20年3月18日午前中、当時、私は立山小学校で子どもたちの面倒を見ていました。すると、中種子町方向の山の上を敵飛行機が数十機飛んできました。

校長先生は「敵機襲来！」と叫び、子どもたちを清和神社の裏山に避難させました。敵機は、増田飛行場を爆撃し、その爆風により立山まで破片が飛んできました。ケガ人も多く出たと思います。

つづく空襲

その日から敵機は度々増田飛行場を爆撃しました。飛行機の音が聞こえてくるたび、住民は防空壕に逃げ込みました。また、太平洋側の海の先には、時おり敵艦隊らしきものも見えました。

立山集落は、当時作られた増田飛行場から近いこともあり、飛行場爆撃の爆風による被害が相次いだ。「いつ自分たちが攻撃されるのか」そんな不安の中、家族を守るため、母は必死に生きた。

艦砲射撃に備え、夜中に海と反対側の山に家族を連れて避難したことも覚えていいます。物音をたてると敵機に攻撃されると思っていたので飼っていた鶏は殺し、防空壕内に逃げた際には、泣く子どもを必死になだめました。

立山から西之表の食糧庫に物資を届ける仕事もしました。馬に乗り、片道5時間の移動でした。女は私1人でした。西之表はすでに焼け野原で、敵機もよく飛んできたため、誰も行こうとはしませんでした。

終戦、母の思い

戦争が終わった時、「戦争が終わってよかった・・・」と思うより、「なんで、もっと早く終わらなかったのか！」と思いました。

夫は兵隊として戦地に向かい戦死しました。戦時中は、子どもや家族を

守るために毎日を必死に生きていました。しかし、夫の戦死の知らせを聞いたときは、さすがに生きる気力がなくなりました。家族全員で死ぬつもりでした。しかし、まだ小さい我が子(娘：カツエさん)を見ると死にきれませんでした。立山でも多くの人が兵隊として戦地に行き戦死しました。みんな、同じような思いだったかもしれません。

母への感謝

私は、まだ小さかったため、あまり記憶はありません。しかし、みんなが防空壕へ逃げ込んだときのことは記憶に残っています。母は、大変厳しかったが、その分、つらく大変な想いをしてくたと思います。今、生きているのも母のおかげです。

いやというほど、大変な経験をしました。いつの時代でも戦争はあってはならないと思います。親の言うことをよく聞き、平和な世の中になるよう過ごしてほしいです。

向田 マシエさん（82歳）

終戦当時12歳

取材日 平成27年7月19日



当時の様子

湊泊^{あまどまり}集落は日本軍の無線塔（現・種子島合同庁舎付近）と西之表市街地の間に位置していました。敵機は無線塔を爆撃し、次の攻撃目標である市街地へ向けて湊泊上空を通ります。その音の凄まじさは、防空壕の中にいても恐ろしく感じました。

また、湊泊から鴨女町にかけての海岸には多数の兵士の遺体が流れ着きました。海岸には、おびただしい数の遺体が並んでおり、身元が判明する人はまれだったようです。妹をおんぶしたまま歩いていて遺体に引っかかり転んでしまったこともあります。自警団の人たちが遺体を運んで、若狭公園の上の方で火葬をしていました。

つらい経験

私は、足の骨髄炎^{こつずいえん}にかかり、医者に

西之表の海岸には、戦時中、多くの遺体が流れて着いた。向田さんは、自分の病気を抱えながら、つらく厳しい時代を過ごした。その中で、人と人との優しさを知ったと言う。

診てもらいましたが、道具も薬も全く無かったため治療ができず、3年経ったら歩けなくなるだろうと言われていました。その後、医者は兵隊と一緒に戦地に駆り出され、西之表には医者がいない日々が続きました。戦争が激しくなるにつれ、学校に行けない、病院はない（医者がいない）、着るものさえない、本当につらい経験をしました。私の父も出兵し戦死しました。父の遺骨を佐世保に迎えに行かねばならなかったとき、私はよそに着ていく服がありませんでした。そのため配給の時、「今度の配給品は靴も服も全部マシエにやろう」と友達や先生がほとんど譲^{ゆず}ってくれました。その時のみんなの優しさが本当にうれしかったです。

終戦を迎えて

「戦争は終わった」という話は伝え聞きました。最初は「嘘だろう、ただ

の噂^{うわさ}」とみんな言っていました。敵機が来なくなったことのように実感しました。事実だと理解した時、みんなで大泣きました。

戦後一番の喜びは学校が再開したことです。榕城小学校の敷地内に中学校を臨時で仮設し再開されました。私の足は骨髄炎のためますます悪くなり、湊泊から通学することが困難でした。しかし、先生が「這ってでも来い」と励ましてくれ、がんばって通学しました。足の骨髄炎も、復員してきた軍医の医師のもと手術を施してくれました。戦後初の種子島での手術だったようです。医者はレントゲンも見ず見事成功させました。おかげで今では普通に歩けるようになりました。

戦争は、戦地で戦っていた兵隊さんだけでなく、家に残った者もみんなが苦しいものでした。戦争で辛い思いをするのはどこでもみんな同じです。だから、戦後はみんなで助け合い、優しさを分けあって生きてきました。戦争を知らない世代へ、そのことを理解してほしいと願います。優しさを大切に！友達、家族を大事にしてください。

沖田 勉男さん (85歳)

終戦当時15歳

沖田 律子さん (85歳)

終戦当時15歳

取材日 平成27年6月23日

伊関の様子

伊関（沖ヶ浜田集落）にも1回空襲があったことを覚えています。その時は、煙草の乾燥施設が海岸沿いに多くありました。おそらく軍用施設と間違われたため、攻撃されたのではないかと思います。その空襲により、5〜6人が亡くなり、内門商店の北にあった神社（現在は別の場所）も焼け落ちました。油入りの爆弾で、海岸が一面焼き払われました。鹿児島本土に向かう敵機隊の軍勢もありました。その数はすさまじく、まるでヒヨドリが渡っていくように見えました。上空に敵機が通るたびにも畑に這って隠れました。終戦が近づいてくると敵機が投降ビラとアメ（？）を撒いたこともありました。

増田飛行場

私は、農林学校（現・種子島高校）に通っていたころ、軍事施設の建設に駆り出されました。増田の海軍基地には木炭トラックの荷台にギュウギュウに詰め込まれて行きました。おそらく30人から40人いたのではないかと思います。

作業は、朝8時頃から暗くなるまで、日中ずっと働いていました。谷を埋めて平地を造成し、伐採した木材を運んで滑走路を造りました。途中休憩はあっても茶が出るわけありません。食べたものといえば干した菜っ葉や、はったい粉（オオムギを炒って挽いた粉）です。うじ虫が入っていることもありました。

宿舎は、毛じらみがひどいものでした。風呂はなかったので近くの海に行き、体を洗って過ごしていました。

兵隊とともに

敵が上陸し攻めてくる可能性があるという情報が流れたため、南種子町の長谷集落に行き、敵の侵入を食い止めるよう穴掘りの作業を行ったこともあります。その時は徒歩で帰宅しました。幸いにも敵は上陸しませんでした。

十三番集落で、兵隊といっしょに作業をしたこともありました。

日本海軍は、昭和17年10月に中種子町増田の戸畑地区に飛行場建設を開始する。西之表市からも多くの学生が建設作業に駆り出された。

長野 幸男さん（89歳）

終戦当時19歳

取材日 平成27年7月10日

満州での生活

「私は17歳で満州に行き、運送会社の仕事をしていました。昭和20年に輜重隊に配属され、ソ連との国境に近い琿春という地に行きました。主な任務は弾薬や食糧を戦場の前線に運ぶ後方支援でした。しかし、この頃には実際の銃撃戦などはなく銃声は聞いたこともありません。奥地であったため、日本の戦況もなかなか伝わってきませんでした。」

終戦、そして 捕虜としての日々

「ある日、任務で山を登っていると、どこかの部隊の歩兵たちが道に座り込んでいました。その歩兵からは「もう戦争は終わった」と聞きました。私はその時、うそか本当か分かりませんが、部隊に戻ると

高等学校卒業後、満州の開元に渡った幸男さん。

昭和20年、軍に配属され、終戦を迎えた。その後は、異国の地で捕虜としての日々が始まった。いわゆるシベリア抑留である。

それが本当であると分かりました。その後、ソ連軍が来て荷物をまとめさせられました。徒歩でソ連のハバロフスクまで移動し、ドルミントンフカの収容所に収容されました。収容所では川の上流から流れてくる巨大な材木を引き上げ、工場に運ぶ仕事などがありました。私は栄養失調などにより亡くなった仲間たちの遺体を墓まで運ぶ仕事をしていました。もう何人運んだかわからないほどです。食事は黒パン一切れと飯盒の中蓋に大豆とひじきが浮いた汁だけ。皆、激しい空腹や労働でもう極限状態となり、パンを平等に切り分けているか見つめる周囲の視線も厳しいものでした。

収容所では毎晩のように共産主義思想の講義が行われていました。真面目に聞いて思想に染まったふりをしたことも帰国が早まる一因になったのではないかと思います。」

帰国

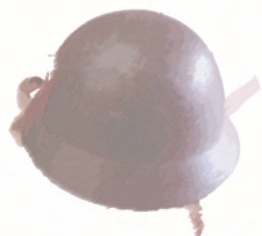
「その後、ナホトカへ移り、そこで1〜2か月働きました。そして、昭和23年9月20日、日本に帰国することができました。中にはシベリアの奥地に送り返された兵もいると聞きます。」

シベリア抑留については国も実態を把握できておらず、労をねぎらわれることもなく、抑留者への対応は納得のいくものではありませんでした。時が過ぎ、感謝状や銀杯が贈られてきました。しかし、嬉しいと思う感情は全くわかず、ただの「しるし」をもらったような気持ちです。」

——もし今の時代に、徴兵制があり、戦争に行かなければならないとしたらどう思いますか？

「いやだ」と思うでしょう。

そういうことをしなくてもいい世の中にしましょうよ。」



展示資料

御沙汰書

天皇や将軍などの最高権力者からの命令や指示を記した文書

この御沙汰書は支那事変で負傷した柳田常壽さんに義眼・義肢と共に贈られた。



国民精神総動員

大阪府経済戦強調週間実施要項

物資の消費節約、廃品回収を呼び掛ける回覧。

国民精神総動員運動は、1937年に日本政府が国民全員に戦争への協力を求めた運動。戦争長期化に伴い、政府は国民全体の戦意高揚と物資節約を求めた。



ラッパ

兵舎での起床、消灯、
戦場での突撃などに用いられた。



てつぼう 鉄帽

軍隊で使用されていた、鉄製のヘルメット。
星のマークは、陸軍のシンボル。



双眼鏡

戦時中使用されたもの。
さめしまみづ
鮫島貢（陸軍士官学校卒、昭和19年3月21日戦死。享年23歳。）氏の遺品。



やっきょう 薬莢（個人蔵）

昭和20年5月頃、西之表市松島の住宅に撃ち込まれた、米軍機の薬莢。



奉公袋

召集の際に兵士が持参する袋で、印章、軍隊手帳、貯金通帳、遺書、遺髪、召集令状などの入営に際して必要なものを入れて携行していた。

せんになんぼり
千人針

白い布に女性が1人1つずつ赤い糸で玉留めを作り、武運長久と銃弾除けのお守りとして出征する兵士に持たせた。「死線（四銭）を越える」「苦戦（九銭）を越える」の意味から、五銭と十銭を縫いつけることもあった。また、「虎は千里行って千里帰る」という故事にあやかって、寅年の女性は年齢の数だけ玉留めを結ぶことができた。



にんしきひょう
認識票

軍人が身につける、名前や所属部隊などを刻んだ札。戦死時の身元確認を行うためのもの。小判型のしんちゅう製の金属板の表面に所属連隊番号あるいは秘匿部隊番号、中隊番号、個人番号を刻印し、木綿糸で首からかけて肌身につけていた。

部隊名「独立歩兵第100大隊」

通称「潮八九八四」。

第100大隊を含む「独立混成第19旅団」3,241名が乗船した「りま丸」が、フィリピン北部をめざす輸送任務中、昭和19（1944）年2月8日に、アメリカ海軍の潜水艦によって東シナ海で撃沈された。

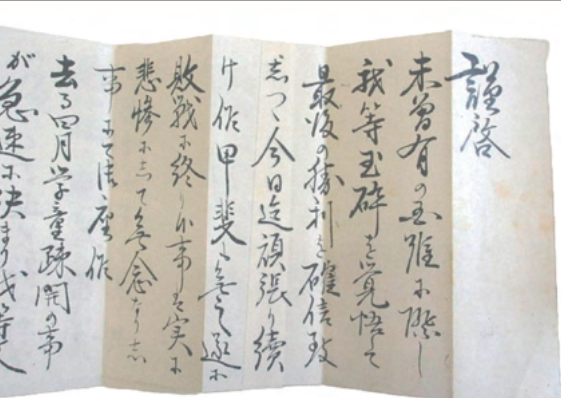
戦死者は2,765名を数え、沈没地点から300km以上離れた種子島・馬毛島・屋久島などへも多く多くの遺体が漂着した。

本資料は、令和4年に馬毛島で行われた文化財調査中に発見された。



ほうだん
砲弾

平成29年9月27日、犬城海岸（中種子町）で不発弾処理された旧日本軍の12cm砲弾の破片。



大口疎開謝状（写し）

西町集落が当時の伊佐郡大口町中戸切集落にお世話になったときの御礼状として、大口市教育委員会に保存されていたもの。



防空頭巾

空襲の際に落下物から頭部、特に首筋や顔を守るために使用された頭巾。同時に頭髮が燃えるのを防ぐ役割もあった。中に名前や血液型を記した名札、お守りなどが縫い付けられていることもあった。

- ・重久生『空襲日誌 昭和二十年七月空襲下における種子島局長時代の記録』1945、未出版
- ・熊本兵团戦史編さん委員会『熊本兵团戦史 太平洋戦争編』1965、熊本日日新聞社
- ・長野菅彦『永久保存 思い出の記』1965、長野菅彦
- ・西之表市『西之表市年表』1968、西之表市役所
- ・西之表市編纂委員会『西之表市百年史』1971、西之表市長 名越不二郎
- ・防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土決戦準備〈2〉—九州の防衛—』1972、朝雲新聞社
- ・ワールドジャーナル『昭和の戦歴 軍魂 嗚呼我が戦中記』1980、地方自治政経調査会
- ・歩兵第四十五聯隊史編纂委員会『歩兵第四十五聯隊史』1981、歩兵第四十五聯隊史編纂委員会
- ・外山操『陸海軍将官人事総覧（陸軍編）』1981、芙蓉書房
- ・少飛十二期会『誰に叫ばん』1983、少飛十二期会
- ・村永薫『知覧特別攻撃隊』1989、有限会社ジャブラン
- ・森友和『戦艦「大和」と種子島』2001
- ・下村タミ子『戦争と私』2015
- ・西之表市・伊佐市『つなぐ—語り継ぎたい思い—』2016、西之表市・伊佐市
- ・西之表市史編さん委員会『西之表市史』下巻 2024、西之表市
- ・総務省ホームページ「西之表市における戦災の状況（鹿児島県）」
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/kyushu_13.html
- ・防衛研究所資料室「大東亜戦争戦史資料 昭和 21.3 種子島兵团（独混旅 109）」
https://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/
- ・ピースくまもと設立準備事務局会 事務局長 高谷和生「第2回くまもと戦争遺跡の旅」資料 P.5 2019
<https://kumamoto-senseki.net/peace-kumamoto/m3/images/20190804/pdf/20190804.pdf>
- ・国立公文書館 アジア歴史資料センター アジ歴グロッサリー検索「第 37 師団（冬）」<https://www.jacar.go.jp/glossary/>
- ・NHK NHK アーカイブス「戦争を伝えるミュージアム」 <https://www.nhk.or.jp/archives/sensou/special/warmuseum/>

戦後 80 年特別企画展

つながる記憶、未来へ

会期：2025 年 7 月 30 日～9 月 28 日

会場：種子島開発総合センター鉄砲館企画展展示室

同時開催：ミニ企画展 in 西之表市立図書館

監 修 種子島開発総合センター 鉄砲館

調査・執筆・編集 和田 正樹（種子島開発総合センター主任）

中園 愛

奈尾 みちる

羽生 なつみ

2026 年 7 月 発行

発 行 種子島開発総合センター 鉄砲館

（西之表市教育委員会 歴史文化課）

〒 891-3101

鹿児島県西之表市西之表 7585 番地

TEL 0997-23-3215



